江口草玄の未公開資料（一）　昭和三十三年（一九五八）―六十年（一九八五）

松矢　国憲

江口草玄が平成三十年（二〇一八）十一月十六日に死去後、令和三年（二〇二一）六月末に澄江夫人が死去され、御親族から、翌四年（二〇二二）に草玄の遺品整理の協力を依頼された。その中に草玄が書き残した次の三種の記録物があった。

① **らくがき帖類**［図1a、b］　九冊。
昭和三十三年（一九五八）～同三十八年（一九六三）
※一年一冊とは限らない。

② **手帳**［図2a、b］　四十冊。
昭和四十一年（一九六六）および、同四十七年（一九七二）～平成二十六年（二〇一四）
※（平成八年（一九九六）および、同二十年（二〇〇八）は欠。また、一冊目（②―1）は、冊子の体裁が異なる上、四十一、四十二、四十五～四十七年の記述が一冊の中にある。加えて二冊目（②―2）は、四十七年と五十年の記述がある。他は一年一冊で、平成二十六年（二〇一四）の手帳に、翌二十七年（二〇一五）一月一、二日分のみ記載有り。

③ **雑記帳類**［図3a、b］　二十冊。
昭和五十八年（一九八三）～平成八年（一九九六）
※一年一冊とは限らない。

この三種は、草玄の家庭や親族のこと、また、書のこと、指導していた『ひびき』での子供のことなど、その時々の草玄の思い、考えが窺えるものとなっている。草玄が自身のための記録してきたものであり、他者に明らかにすることを前提として記述してきたものではない。欠けている年のものもあるが、これらを読み解くことは、草玄の偽らざる自身の姿を知る上で非常に重要であると考える。

この三種の草玄自身の備忘録的未公開資料を筆者が書き起こし、本稿では、その中から「書」や「芸術」に関係すること、草玄の制作姿勢や、研究内容が窺えるもの、人生観の記述を抜き出し（関連内容であっても断片的な記述は、省略）、註釈

図1a　らくがき帖類　九冊

図2a　手帳　四十冊

図3a　雑記帳類　二十冊

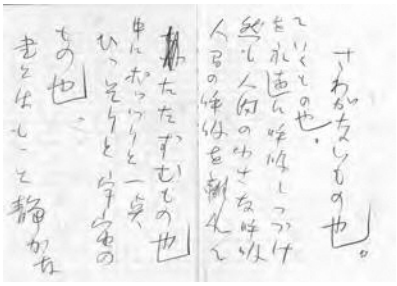
図1b　①-1　昭和三十三年十二月十日―十三日の間（部分）

図2b　②-11　昭和五十八年八月（部分）

図3b　③-6　昭和六十年四月一日（部分）

を加え、草玄の真の姿をまた一歩詳らかにしたい。なお、分量があるため、昭和三十三年（一九五八）から平成二十六年（二〇一四）までの記述を数回に分けて紹介する。

【凡例】

・旧字体は、新字体に改めた。旧字体のままが良いと判断したものについては、旧字体のままとした。
・句点が読点のようになっている箇所が多いが、筆者の判断により、句点に変えた。
・○または□で囲ってある字句は、「　」に統一して表記した。
・矢印などを引いて、考えや説明等を加えている箇所は、その指示内容について（　）内に説明を加えた。
・本人の控えとしての記録のため、改行は極力避けたが、改行が必要と思われるものには、「／」で改行を示した。
・他者の文が草玄の記述の内容理解に必要な場合は、文字の級数を下げて掲載した。
・記録された年ごとに、各記録の先頭に、記録月日／筆者の付した概略名／掲載冊子種別（上記①～③）－冊番号、を記した。
・その日の記録の全体に註解が必要と思われたものには、記述の最後に【解】を加えた。また、記述中の個々の註釈については、（註（漢数字））としてその註釈をその記述の最後に記載した（註解がある場合は、註解の前に記載）。
・註解に取り上げた作品で、当館で平成三十年（二〇一八）開催の「白寿 江口草玄のすべて」図録の草玄書作品目録に掲載の作品は、（白寿P（数字）、作品番号）を記した。

昭和三十三年（一九五八）

三月二十四日／入院中、書への姿勢／①－1

昔、戦争中だったら衛生兵に風呂敷包みをぶらさげて貰って、ダブダブの上ばきをはいてゾロゾロと転入して来る風景だが、入所時間を過ぎる事、30分、10時半に到着する。これから当分の生活の場／肺活量3,200／体重50.05k（13貫500）着衣のまま／身長、？

時間を持てあまして、自分の時間がたっぷりあるようだが、病院全体の流れに押し流されて、タイクツしながら、自分の時間が無い、面白いことだ。こういう病院というところは、「書」の想念とは全く関係ない所だ。「書」が生まれないのだ。自分という人間が医師の弱さをバクロしているのか、或は、ここには「書」は必要でないのか、或は育たない何かがあるのか。「書」、書、書、書、書を思う絶好の時間と場所が与えられていながら、それが可能にならないという事は矢張り、不安と、淋しさだけが残る。終日、口を開かず寝ている。

【解】肺結核で入院直後の記録と考えられる。『白寿 江口草玄のすべて』図録（以下、『白寿展図録』と表記）に、草玄からの聞き書きおよび、同年四月四日消印の井上有一の手紙「入院した由、遠いので御伺い出来ず残念です。（後略）」から、四月入院としていたが、その有一の手紙以前の三月十日に有一からの病気見舞いの手紙が送られていることからも、既に罹患し、三月中、下旬に入院するまでとなっていたと窺え、入院は三月中、下旬からと訂正する。

三月三十一日／入院中、見舞い訪問者／①－1

午后、辻様が来た。いろいろと「ひびき」の今後の事、生活の事など話し合う。もう、どうでもよい、餘計な考えはしないで、流れのままに。考える事その事が面倒になり、体がつかれて来る。堀尾君来。

【解】昭和三十一年（一九五六）秋から、墨人会事務所は、辻太宅になっていた（『墨人』49　昭和三十一年（一九五六）十月一日発行）。『ひびき』は、昭和三十一年三月号を創刊号として、草玄が編集発行した児童・生徒向けの書の学習誌。主宰となって二年余りでの長期静養から、心配されての辻の見舞いであろう。同三十三年（一九五八）一月七日消印、篠田昭二からの手紙「体の調子が悪いとの事。心配しています。／寄らずに帰ってしまって…。御見舞申し上げます。〝ひびき〟の仕事、お手伝い出来ることがあったらいいつけてください。一日も早く、すっかりよくなるように。でも気長にゆうゆうと、がんばってください。」も残っており、年初から不調であったことが窺える。また、末尾の堀尾君は、堀尾勝彦のこと。同五十六年（一九八一）、草玄が墨人会を退会した後、『ひびき』を『響』として引き継ぐことになる。

日付不明（六月十日―十一月四日の間）／**子供の作品／①－1**

○よい作品、悪い作品／○楽しんで書いているか、どうか。然し更に「健康な心か、不健康な内面か。」／○では「字の形」は全くいいかげんでもよいのか、形に対する指導は？／表面的な形でなく創造的な形／子供のありのままの心は上手、下手を越えたものである、上手であっても、下手であってもかまわない。

日付不明（六月十日―十一月四日の間）／**子供の作品／①－1**

起挙振るまいにその子供の生活の銑端が表われる。だから、一つの作業をさ

せることによって、その子の生活をその子自ら耕していくことの必要を思うわけである。

十一月二十日／第四(五)回墨人公募展の感想／①－1

鑑別(註一)／淡墨がはやり也。森田の淡墨無底(註二)。淡墨の自我也。宇宙にとけず。有一(註三)の『豚』面白し、「灯」は効果のみ。関谷はコンマ以下也。篠田の作品も買えず。／辻また破り得ず。華空相変らず也。浪元にやや見るところ有り、そう也。／今岡冴えず。／堀尾、米田は昨年の方がよかった(註四)。

(註一) 第四(五)回墨人公募展(十一月二十一日－二十三日、京都市美術館)のための作品鑑別。

(註二) 同展に森田子龍は、《無底》四点ほか七点を出品している。

(註三) 井上有一。淡墨による《豚》ほか十点を出品している。

(註四) 関谷義道、篠田昭二、大澤華空、浪元喜美子、今岡徳夫、堀尾勝彦、米田信夫、いずれも三点出品。辻太、五点出品。

【解】 草玄は、《冱》四点を出品している。内二点《冱1》、《冱2》は図像不明。《冱3》(白寿p161、S33-12-3)および、《冱4》(同、S33-12-4)。

十二月十日／墨人会の人間関係／①－1

(33／12／9消印、辻太方墨人会事務所からの手紙貼付有、以下同文)おかわりありませんか。／墨人展(註五)の時に一月号に同人が「亥」を半紙に書いて出すことと、年頭のことばを五十字以内で出すこととをきめました。うっかりして連絡する事をわすれていて申訳ありませんでしたが、何とか十五日までに小生までとどけていたゞけませんでしょうか。／一月号早く出したいので、スペースをあけて編集しておきますからよろしく、いい年を迎えください。／[勝手ですがおゆるし下さい。]

→員数外のヒガミか？／墨人会というものの底には、非情が流れている。いかに人間性を口に言っても全て非情なる人間の集り也。或はそれが人間の本来かも知れぬ。

(註五) 註一に同じ。

日付不明(十二月十日―十三日の間)／墨人批判／①－1

墨人の思いあがり、危機也。／墨人は書をすくうものにあらず。／昭和三十四年というても、亥であろうが猫であろうが、動物が支配者であることには変りがない。／書とはもっと静かなもの也。／ひっそりと宇宙の中にポッツリと一点たたずむもの也。人間の呼吸を離れて、然も人間の小さな呼吸を永遠に呼吸しつづけていくもの也。／さわがないもの也。

十二月十三日／草玄のおもいあがり／①－1

草玄のおもいあがり。

日付不明(十二月十三日―十五日の間)／①－1

(カーネギー財団トッド氏の新聞記事貼付有り。「アンフォルメルといったような新しい運動が起ることはよいことだが、画家は自己を捨ててはならない。」部分を鉛筆で囲む。また、「社会にでると、政府や組合がきめた一定の規約や標準に従って製作しなければならない。」部分も鉛筆で囲み、)

→「どういうことか？」／何故アンフォルメルは自己を捨てることになるのか。

十二月十五日／ゴッホ展鑑賞／①－1

午后、ゴッホ展。昼食がおくれたので円町で松下氏を待たすこと一時間也。／[画く鬼]／(籠字で)[ゴッホ]

【解】 ファン・ゴッホ展、十二月三日―二十七日(会期延長翌年一月五日まで)、京都市美術館で開催。同日消印の半券の貼付有り。松下は、松下桂香。

日付不明(十二月十五日―十七日の間)／制作の意気込み／①－1

画くことから仕事の道は拓ける。／画け、!!／書け!!!／書け!!!!草玄!!!

日付不明(十二月十七日―三十日の間)／他の力／①－2

自分ひとりの力で生きてると思うから心配なのだ。自分でうまれようと思って生まれてきたものはない。また二百まで生きようと思ってもそうはいかない。生も死も自分の力ではないはずだ。／私たちはなにものかの不思議な力に生かされている。その力にまかせきれ。

昭和三十四年（一九五九）

日付不明（十二月三十日―翌年一月四日の間）／**独立展を見て**／①－2

独立展、抽象から具象への方向←個々の内的な必然というよりか、何か時代の風調（ママ）におくまいとする姿勢を思うが。／社会的な落着きか。流行か。

一月十二日／**草玄自問**／①－2

1.12（月）／書を指導出来るのか草玄。動物草玄（ここまで鉛筆でつぶして有り）。／後悔／ショウ動

日付不明（二月八日以降、二月中か）／**草玄《冱》への愛着**／①－2

墨美一月号、久松先生が昨秋の墨人展の作品を取り上げて批評しておられた（註六）。墨人誌に簡単に分担して批評されていると同様、或は又、新聞に上平氏（註七）がとりあげなかったと同様、エグチのエの字も無し。それほど全くつまらない作品であったのだろうか。／「冱」は然し俺には愛着あり、絶対なり。クソクラエ!!だ。

（註六）久松真一。京都大学定年後、京都市立美術大学教授。『墨美』一月号（№82　昭和三十四年（一九五九）一月一日発行）、久松真一「墨人展に期待するもの」。

（註七）上平貢。京都大学文学部助手、京都市立美術大学専任講師。

【解】前掲、第四（五）回墨人会公募展出品の《冱》四点。前年十一月二十日の【解】参照。

日付不明／**松田権六からの影響**／①－2

世界1月号所載の松田権六氏のお話し「うるしの話」（聞き手／北川桃雄）を読んで光琳と光悦のこと、光悦の卓抜した意匠とか、「名品に重いものなし」とか、茶わんのことなどを読んでいると体の中が底から、ムズムズして来る。ゾクゾクするともいい得るか。／若々しい新芽が体の底に芽ばえて来るようで、「ハーッ」とタメ息が出て来る。／作りたい。作りたい、作らねばいけない。俺の体が動きたがっている。

五月十四日／**コルヴィッツ展を見て**／①－3

（昭和三十四年五月十四日付『朝日新聞』小野十三郎「ケーテ・コルビッツ展から」記事貼付有り。）

現象面に於けるコミュニケーションと内的なものとの一元化

日付不明（五月十五日―二十九日の間）／**書の制作への自論**／①－3

制作をするということの必然性を、こういった大きな抵抗感とか、正義感とか、言うならば人間の声として自分の奥に大きく芽ばえた結果としてでなければ意味ないと思う。我々が「書」を書く。それだけでは全く無意味である。何かに大きなイキドリ（ママ）を持ってこそ、制作することの根本にならねばならない。それを探らねばならない。

六月二十五日／**自分を顧みて**／①－3

午后四時前から盛んに雷鳴、夕立。いま四時十五分、雨をぼんやり見ている。何もかも虚脱状態のこの頃なり。頭の中も、そして体もどこか六本位、ネジをおっこちた感じだ。／こんな事では天下の草玄も全く台なしだ。／こういうふうに、降る雨を見ていて、雨に関するいろいろの面白いことでも、その方向に頭が回転してくれたらよいのだが、もともとそういうことはカラッポなので生憎く文学的には浮び出て来ないで、バク然とそれもしばらくしていると、かつて京都に来たての時、エイ電前でものすごい雷雨にあったことを思出している。高圧線に落雷してスパークした時の音、ゴー（ママ）雨の中にたたずむ自分の心の抵抗感を今（ママ）だ忘れることなく昨日のように浮んで来る。／何か、こういうふうに、自然の力のたくましさ、並に、その力強さに抗しようとする人間の心というものの常にきびしさを、もとめようとしているものを思う。ボンヤリ、フワ、フワしているのは療養がさせる生活の［怠惰］からかも知れない。／今日は天神サンである。先月の天神サンに初めて行って釣って来た金魚も今は、黒い出眼金が一匹、［水草］もとつついている。夕立、もう止んでしまっている。四時二十六分

七月十日／**「かな」書への思いつき**／①－3

墨美、良寛号来る。／以前から考えていたのだが、作品となる文字は「かな」一字としたら面白かろう。淡墨で、線を引きしぼって響きを高く、深くして、字を書くという意識でなしに、空気をはらんだ影をそっと置いていく、というような、ことで書作出来ないか。

【解】「かな」書への関心が既にこの頃からあったことが窺える。「空気をはらんだ影をそっと置いていく、というような、ことで書作出来ないか。」という考えが、後年の「かな書き」の表現に繋がるとも考えら

れるか。

七月十六日／有一手紙への返信／①－3

有一よりひびき作品の批評と一諸に手紙が来た。その手紙と、返事を抜書する／――ひびきの件の返事は略――／○シャバにはまだ出られそうもありません。一応は今年一ぱいと予定はしていますがこの頃のゼン衛書道はさっぱりむつかしくなって来たようで、僕なんか、すっかり古くさくなっているようです。ガー、ガー言い合っていても書壇というところは、部外から見ると何と天下泰平なことだと思われて来るのです。重箱のスミ（墨？）をほじくっていれば、たのしい旅行も出来るし、そのスミをホメテイレバ当分ノドのカワキをうるおしてくれるだろうし。／どうもこの頃の何もカモイイカゲンな字を『「書」でございます』なんていって、書いているようでカナイマセン。といって、さて、自分ならどういうことになるのか…これも又、全く自信がなくなって来ています。草玄は一体どこへ行くのでしょうか、これが解決出来るまで病院に居るか。／案外、木子（註八）のあたりが、発表はしないが、ホンマモンの仕事をしているかも知れない。／岡本太郎の生き方も、花の蒼風の歩き方も、又、建築の丹下とかいう人の呼吸のし方も案外、それらの人たちの方がノーマルなのかも知れず、こんなふうに、ひがんでモノを見ているボクなんかがアブノーマルなんでしょう。／我々が制作するということそのことは最早すでに全く孤立した私でなく、私タチの中に於ける私であるということ、自分以外の第三者を意識する、しないにかかわらず、第三者というものの中に於ける自己がその自己以外の人ビトに呼びかけるという意味に於て仕事をしているわけですから。／更に言うならば、「社会」というものを忘れることは全く不可能なことでありますが、ドウモ、その「社会」が気に入らぬ。人間が気に入らぬ。岸サンと安保条約のセイか？。／良寛の気持も少しはわかるような気もして来るのです。どうしたらよいか。混乱、混迷中ナリ。

（註八）　中村木子。佐渡出身。木子は家業の水産加工業が多忙で、昭和三十二年（一九五七）早々から墨人会を休会している。同年九月には、有一が北海道での墨人研究会の帰路、東京駅八重洲口で偶然出会い、「仕事が忙しいのでここしばらくはだめだが、来年はきっと書の道にたちもどれる」と語ったと記録されている。拙論「佐渡モッコ、中村木子の生涯と作品」『新潟県立近代美術館研究紀要』第十五号（以下、『拙「木子」十五』と示す）参照。

七月三十日／作品を批評するということ／①－3

『造型新報』七月十五日、二十五日合併号が来た。暑中見舞の名刺交換で墨人会の住所が矢張り、相変らず「京都市上京区椹木町黒門東入ル　電話、壬生（84）4902番」となっている。岐阜の辻のところが公的な墨人会事務所になっている筈なのだが、非常に不可解な事也。（註九）／辻のところは会内部の為のだけの住所で、京都の椹木町が対外的な住所であると、いう規則が誕生したのだろうか。／併せて、この紙上の名刺交換には森田子龍だけが出ていた。勿論他の人達は、掲載を要望しなかったから出ないのであるが、そして、子龍は僕等と違って、所謂書壇の中に於ける交友、関係もあるので、断るわけにはいかないからでもあろうが。／然し何か彼の心の奥には、僕なんかとうてい理解の出来ない、不可解なものがひそんでいるような気がしてならない。／作品の批評会に、こんな発言したらどうだろうか、「僕は好きになれませんネ。この好き嫌いということは全く僕個人の主観で、僕はこの外に、一般的に、又は客観的に、或は批評眼的に発言することが不可能だからです。そういう能力が僕には欠けているからです。／ただ、もう少し言わせて貰えるとすれば、好きとか嫌いとかという言葉が出るということは、作品には何らかの力と内容があり、その内容がこちら側に発散というか、発信して来ているからであり、その響きを僕自身が受信しているからだ、と言うことが出来ようかと思う。然し僕の体の中のこころよい所に響いた時にはその作品は僕にとって好きな作品という発言をするのだろうし、そうでない場合に響いている時には好きになれない作品と発言するだろうと思うわけで、だから、この場合、例えばその作品が一般的、或は客観的にいい作品である場合には僕の受けとめ方が間違っているのだろうし、又その反対のことも言えると思う。／ともあれ、一般的に言って、いい作品であろうと、どうあろうと、そのこと自体は僕にとっては何の関係もないことであって、僕にあるのは、ただ、その作品が僕の体の中の一番心よい所で交流し合うということの方が余程大切な事柄であるという意味から、好き不好きという言葉で申上げるのです。／又　或は、全くつまらないか、作品が何の発言もしていない場合には、僕はいうでしょう。「僕にはどうもむつかし過ぎてわからないのですが…」。／本当は全く興味が無いという事であり、そういうものに対して関心を持つことの無意味、エネルギーの損を思うからである。そして固く発言の口を閉じるであろう。／「批評」ということは一体どういうことなのだろう。どういう内容と方向とを持たねばならないのだろうか。／ショセンは、批評する人の「思想」であり、それに則って

批評という畠を開拓していくことではないか。いわゆる全く批評者の「主観」でものを見ることから出発するのではないか。／そうだとしたら先ず矢張り「好き」「不好き」がその根底になるということは事実ではないだろうか。／―7．30―午前11時15分

（註九）同住所は、当時の森田子龍宅。

八月十三日／日本前衛書作家協会／①－3

夜となく昼となく雨、大雨のふりっぱなし。午后安静時間後、帰宅、して来信を見ている中に、日本前衛書作家協会からもの（ママ）あり。もうすでに退会している筈なのに（註十）と、いぶかりながら開封したら、資料として前衛作家のアルバムを作っておきたいから、その為の資料と金をおくれとのこと。そのままにしておくこと。孤独になれ、それに徹せよ草玄。

（註十）日本前衛書作家協会は、昭和三十二年（一九五七）八月十日創立、同三十四年（一九五九）には、活動が終了しており、有一や子龍が創立発起人に名を連ねていたことから、草玄も加入したと思われる。しかし、草玄は、昭和三十三年当初から体調不良、そして三月からは、入院、療養しているので、ほとんど活動をしていなかったと思われる。

九月十三日／席上揮毫／①－3

昨夜電話で約束していたので、八時半、外出、家に寄り、スクラック（ママ）・ブック、作品、写真等を持って出かける。／一美だけ留守番、雨の中、途中、墨美社に寄って、十一時半、栄町の新保氏自宅の方に行く。すでに皆さんお待ちかね。／江崎グリコ会社の江崎清六氏と初対面。中食（ママ）のうちに、中国の話、満州の話、種臣（註十一）と実篤（註十二）の書の話、不折（註十三）の話いろいろ、さて、席上揮毫という、これだからいやになるのだ。席を立ちたい位のクツヂョクを思ったが、上野さんの事であるので、それ程出来ない。／若し、帰りに、お礼の金でもくれたら、つっかえして、飛んで帰ってやろうと思った。／秋草を江崎氏が画いた。僕は「一潤水」と讃をした。どんな風に書こうと思ったが、ままよ、好きなように書いてやれ、どうせこんな古い頭の連中には、所詮、何もわからないのだ。上手だと思って貰わなくてもいいのだ。／次は江崎氏、タンポポと土筆の絵、小生「いろはにほへと…そうげん」と、字をはみ出しながら書いた。いい気持だ。何故なら、みんな、表面は何か感心したような顔をしているが、内心は何か何だかわからん、というのが本音だろうから。／今度は色紙に（棒状の形から長い毛6本出ている絵）を画き、「隻手音声」と書く。富士山を画き「独坐大雄峯」と書く。半切に又、秋草を画き、「養人一間水」の詩を書いて終る。／富士山の色紙がいいので持って帰ろうとしたが駄目。そのくせ、大急ぎで、半切と、もう一つの秋草の作品を彼、しまう。気に入ったらしい。大したことなし。

（註十一）副島種臣、号蒼海。佐賀出身の明治の偉勲、その書はその中でも異彩を放つ。

（註十二）武者小路実篤。

（註十三）中村不折。小山正太郎に学んだ洋画家。帝国美術院会員。書についても博識で、昭和十一年（一九三六）書道博物館を設立した。

日付不明（十月三日―十六日の間）／**感動とは静かなものである／**①－4

『感動とは静かなものである。』、墨人9月号の篠田の文中、いい言葉だ。ただこれは篠田氏の言葉というよりか、すでにどこかで聞いたようではあるが。

十月十九日／谷内六郎の絵を見ての自省／①－4

10．19附の週刊新潮を手にし、表紙を見る。ＲＯＫＵＲＯの表紙也。「枯葉のバレー」、少女が枯葉が地上に舞うのを見ている、夢のような画也。枯葉を見て、このように想像する心が、自分にすたれはじめているのに気づき、ハッとする。

日付不明（八月頃？――十月二十八日の間か？）／**書とは／**①－4

書は字だ。ただ、「立派な字」ということだ。字からはみ出しては、書に生きる意味がない。然も、だれが読んでも簡単に読めて、楽しく、深いものが書きたいのだ。

日付不明（十月二十八日―十一月一日の間）／**墨人展鑑別評／**①－4

○最大公約数的なものだけでは特異な作品の場合は浮びにくいが、然し、「集目の一致するところ」という点も考慮していかねばならないだろう。／その意味で、鈴木嘉雄の「雄」が全然問題にされなかったのは残念である。然も、A票なしの今岡徳夫の「極」が墨人賞として決定している。見落し、見間違いと言うならば、「しっかり作品を見てくれ」と言われても致し方あるまいに。

【解】第七回墨人公募展（十月二十八日―三十日、京都市美術館）に草玄は、出品せず。目録【図4】および、鑑別表【図5】の貼付有り。

図4　第7回墨人公募展目録

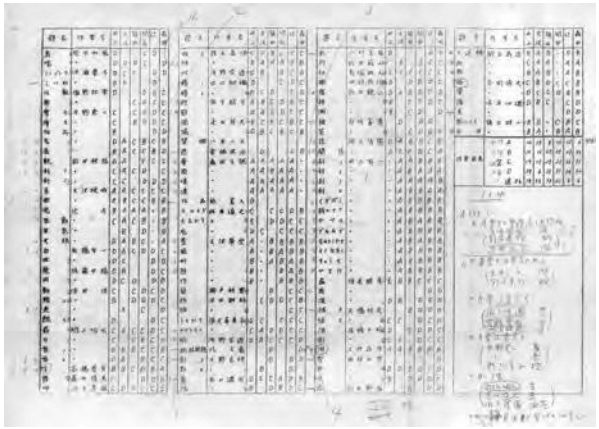

図5　第7回墨人公募展鑑別表

日付不明（十月三十日か？）／**久松真一と草玄**／①－4

三十日に森田サンに会った時、久松先生が御不快の由聞く、然も常に、森田サンがお伺いするたびに僕のことをお尋ねになられる由。うれしい心で一杯になってしまった。それに答えることの出来るような自分であるべく、努力しなければならない。洗われるような、心、になって来る。

日付不明（十一月二十日―二十四日の間か？）／**クールベ《石わり》を見て**／①－4

（クールベ《石わり》の日付不明新聞記事貼付有り。）絵は説明でない為に作品というものが、それを見る人に対して話しかけをしてくるものだと言う、そして、その話しかけの内容、その深浅、高低で評価し得るのだと言う。上の図の場合、その話、しかけは単に、ここに書かれてある二人の人間を見て、その人間の生活内容を考えることが「絵を見る」ことの意味になるのだろうか。／絵というものが、単に一部の愛好者の中だけで育てられて来たものを、クールベは確かに、一般の中に、即ち、大衆の、働らくということの中に力強い人間性というか、生活力というようなものを見た点ではすばらしいと思うのだが、若しこの解説のようにそこに書かれてある人間を見て、考えることならまだ〳〵。やはり、写真機でもことが足りると言えないか。／○風景画はどう考えたらよいのか。／○人物も風景もない、アンフォルメルとか、抽象絵画は。○書は。

日付不明（秋か？）／**臨書について**／①－4

去る墨人公募展以前の或る日、森田さんをたずねた時の話の中。「今、臨書しようという気持になるのはこの竹山聯句より外にない」というようなことを言っていた。以前は光明皇后の楽キ論とか、聖武天皇の雑種を言っていたが。僕も竹山聯句は大好きなもののうちの一つだがそういうふうに結論的にはまだ言いきることが出来ない。

日付不明（秋か？）／**墨人会運営への反論**／①－4

墨人会が、盛んに、北海道研究会のフイルムを他数の人に見せようとしている。反対である、「前衛書道」という「方法」を先に植えつける結果になるからである。／気負った抵抗感を意識し過ぎている、（以下無し）

十二月二十一日／**芸術を思う心**／①－5

一方また、同日の同新聞の学芸欄には田村秋子の話しがのっている（註十四）。所謂生活権のことなど一言も言わず、「あの芝居はよかった…」、「これを見て涙だがポロポロ出るんです…」、「…一方が生活権をまっこうからふるかざしてワメイテいる。／一方は人間の次元の高さをシミジミした言葉で話をしている。前者は年末的であるかも知れない。が、何か一つ大事な事柄を忘れているようだ。立派なものに感激する心、そういうものを作り出そうとして一刻も休みなく歩こうとする姿勢の尊きを思う。芸術家バンザイ。

（註十四）「田村秋子さんの近ごろ」十二月二十一日付新聞記事貼付有り。（偶然展覧会を見て、びっくりしました。小さな盆栽がね、クヌギが一本すっと立っているだけで、ちゃんとふんいきもって、なにか無限のものをかんじさせるんですよ。」の記事を指して、）「いい眼のつけどころだ」と記載有り。

昭和三十五年（一九六〇）

日付不明（一月十一日―十五日の間）／**日展不信再び**／①－5

日展というやつを本当に久しぶりに見た。書の部、相変らず変りばえがして

いないようだ。全然、制作する時の気迫というようなものが無いのではないかという疑問が残った。とに角、決ったペースを走りきるというそのことだけみたいである。／その点では矢張り、質の点では問題があっても豊道春海とか、それはそれなりに、という前提のもとにではあるが、西川寧とか、やっぱり自らの力でレールの先端を走っているという感を持った。／翠軒は、今迫の観念の中にある翠軒のよりは拙いと思った。空気がわいて来ないのだ。もっと白がゆういで来る筈だと思っていたが。／松井如流の二曲に四字書きの作品、勇カンではあるのだろうが、充実したい線を引っぱっているものだ。／右卿の寿の作品はさっぱり好きになれない。弱いのだ。まるで字が生きていない。動かない。根がないのだ。西川より、豊道より悪いこと数等と思う。筆だけの仕事で、透倣した人間がその支えになっていないからだろうか。／とに角、好きでない肌という感じである。戦前は好きであったのだが、これだと、あの当時好きだと思った僕の眼がおかしかったのかも知れない。

【解】 第二回新日展京都展。昭和三十四年（一九五九）十二月十七日-翌年一月十五日、京都市美術館。同展の半券貼付有り。豊道春海《八風吹不動》、西川寧《陳鴻寿詩》、鈴木翠軒《唐詩七言二句》、松井如流《虚心抱懐》、手島右卿《寿》が出品されている。

一月十五日／墨人会、奎星会、日展作品と古典との比較／①-5

一月十五日朝、起床前、寝室の中でフッと思い浮べたこと、墨人会の作品と、奎星の作品と、先日見て来た日展の作品とを並べてみる。／墨人は森田、有一であり、奎星は宇野、上田、日展では豊道、西川の作品がそれを代表すると言えよう。その他は問題でない。他の団体も問題として取り上げる価値を見出さず。／そこへ、古典を持ち込んで来る。雑集、光明皇后の楽毅論、顔真卿。九成宮を持って来てもよい。更に、鄭文公下碑、開通ホウ斜道、弘法大師を入れてもよいか。そこで比較して、考えてみる。／墨人と古典、強さに於て共通している、それは人間の命、人間の気迫というたものが両方に宿されているからだ。然し、ゼイ肉が多い。よごれている。澄んだ空気、深いもの、高いもの、ギリギリ結着のものというと矢張り古典である。／奎星と古典、これはもう全然問題にならない。高くそびえている古典の足もとにバラバラとくずれている姿が奎星である。作品ではないからだ。／日展と古典、そこへいくとまだこの方がいい。次元が違うし、宇宙感が小さいが、それなりに仕事をしている。然し、オーソドックスとはこんなもので安住していたのでは可愛いそうな人達だと言わざるを得ない。／古典が相変らずゲン然と存在する所以であろう。

日付不明（一月十五日―十九日の間）／**書に於ける文字／①-5**

絵というものは矢張り何らかの具象がなければならない。フッと見た時に、ただ色と形とがあるだけでは、それを見て考え、感じ取るまで時間が必要とする。その時、何らかの具象があれば、先ず一番はじめて安心感を持ってその絵の中に自分の眼を没入することが可能になるような気がするからだ。／その意味でも、書は矢張り読める字が絶対だと思う。勿論、そのことが唯一の第一義的なものだという意味ではないのだが。

日付不明（一月十五日―十九日の間）／**ひびき展案内文案／①-5**

ひびき展案内文案（註十五）／〇書の持つ世界観の高き、きびしさ、深さというものは他にその類を見ないほど独自なものとして、誇っていいものだと思います。〇それは、書というものが、それを書く側としても、また、見る側としても、人間の底に直接つながるからです。〇書が世界の注目を浴び、高く評価されつつある所以もそのことにあるからかと思います。（↑でここを指し）もっと平易な解説文がほしい、書を書く時、心を最も大切にしようとします。／〇子供たちが、自分というものの底から全く自由にそして制作活動をしている時、その子供たちは「ほんとうに充実した生き方」をしていると言えます。そういう先生方を書の中に私たちは考えているのです。〇そのことが最も端的に可能である書に書教育の意味を考えているわけです。／〇書というものを生む人間の尊さを子供の中に見出そうとしているのが私たちの考え方です。高らかなこの子供の声を姿／聞いて頂けたら／子供たちの展覧会です。でも、ここにこそかけがえのない生命を、書を書くということの中で純粋につかもうとしている姿を見て頂きたい、自ら育つその人間の命を書の命と（以下無し）

（註十五） 「ひびき展」は、昭和三十五年（一九六〇）時では通称、正式には「全日本青少年書作品展覧会」。同三十九年（一九六四）から正式名称となる。拙論「江口草玄の書の雑誌『ひびき』について」『新潟県立近代美術館研究紀要』第十九号（以下、『拙「ひびき」十九』と示す）参照。

日付不明（一月十五日―十九日の間）／**井島理論と子龍理論／①-5**

墨美一月号は「マチエール」の問題。書に関する井島理論、どことなく新鮮味が感じられない。何か、どこかにネタ本があるような気がしてならない。非常

にうまい言葉の言いまわし方をしているが。とに角、話術、座談術はうまいものだ。／それに引きかえ、子龍の「筆、墨、紙」という論文は大きな収穫である。殊に筆の問題を、これ程具体的に推論し得たものは今までに見ない。偉大なる子龍である。常に数歩先んじて歩いている子龍。自己を省みて誠に慚愧。常に眼の前に横たわる大きな、大岩石である。

日付不明（一月十九日―二月十四日の間）／**作品と人間の在り方**／①-5

○絵にはカメラの出現で、物の形をほんものそっくりに書くことがその使命でなくなった。だから、外のもの形に如何に似るかという、それを評価の基準にして来たが、最早それは足許からくずれ去った。では絵の何を見たらよいのか、作品が純粋であればある程、「人間」という層に於て共通の基盤に立つパッと通じ合うことの出来るということはそこにある、ものの形を乗り越えた、もう一つ奥の方にあるもの、そこで通じ合う――平和とはそういうもの、（人間の尊厳を／強張（ママ）しようとした結果、「神」ということが出て来た）／○前衛とは、今、生きている人間はすべて前衛である。そういう人達がものを作ったら、それはすべて前衛作品でなければならない。にもかかわらず、前衛でない人、前衛作品でないものが多い。例、打算、計算、地位、慾／だから、前衛とは全く純粋な人間性のことであると言える。前衛の――一般論でなしに、根本論――人間性の在り方が問題でやはり、「形」ではないということ。作品の背後に純粋な人間の実在感が宿っていてこそ作品と言える。□（不明）□（不明）はそれでなく、単に人間の知だけで□（不明）えてることが出来る。

日付不明（一月二十三日―一月末の間）／**書の特質**／①-5

墨人一月号の大灯国師臨書の部に有一が面白いことを書いている。「…傑作というものは、えてして、部分的な技術をみると別になんでもない、つまらないようだが、その全体からふしぎに躍動しているものがある、といったものが多くはなかろうか。勿論その場合といえども部分的にも立派なものなのであろうが、それをみるだけの目がこちらにない場合も多いといえよう。」と。／技術以前の「底」を見たら、さて、それをどう表現したらよいか、表現はまた技術でもあるだけにむつかしいところだ。そして然も書というものの最も独自な特質とする問題の所でもあろう。この扉が自由に開けたら大きな天地に生きがいを本当に持つだろう。

日付不明（一月二十三日―一月末の間）／**近代詩文での書と言葉との関係**／①-5

所謂近代詩文という奴を主に考えた書と言葉との関係、文学的な、読み、意味、内容を伝える為に書の場があるのでなく、文学的な意味内容までも、書で伝えるのである。／だから読めることが第一義としてはないのだが、必然的に、というか、自ら読めるということの中で仕事が十全に為されていると言うことにもなるのが書であろう。／全く結果的には同じ形式ではあっても、その主体に於て大きな差異を持つのである。／最も、そのことは、その作品の「形なき形」を見ることに於て、――底の底に於て――何ものかを見得るか見とれないか、判然とそのことで、わかれて来よう。

日付不明（一月十三日までの間）／**書は文字として理解できる範囲のもの**／①-9

内的な感動を受けることの出来る作品は、それが字として読めようが読めまいが、どちらでもいいと思う。／然し、この時、その次に、更に、その字が読めて理解出来たら尚一層いい、という意味で、書は文字としても理解出来る範囲のものでありたいと思う。／がまた然し、この場合、「みる」という感覚的な働きよりも、先にその書かれてある文字を読み、且、理解しようとする、所謂、知的な方向だけが先走って出て来るので、これも又危険を含んでいる。むつかしいところであろう。

日付不明（二月十四日―五月二十七日の間）／**言葉**／①-5

左千夫のものは全然読んだことのないような不勉強者ですが、この言葉いい言葉ですね。全く、すごい言葉だと思いました。どういう意味ですごいかというと。――○「神秘」とか「わからない」といい（ママ）ということに対する反ぱつ。○井島先生の言葉に新鮮さがない。○言葉というものはその人の育って来たもの、或は置かれている場所によっていろいろ違って出て来る。例えは（ママ）今月号の篠田氏の何か左翼的な言葉のいいまわし方。

日付不明（二月十四日―五月二十七日の間）／**古典の現代的鑑賞**／①-5

（日付紙名記事、角鴎東『萬葉漫歩』を→で指し）ヒント「古典漫歩」が出来ないか。

「解説」では書道全集など出来る限りの文ケンを出し、古人の、その碑に対する考えをすべて集め、更に現代意識の上に立った、新しい、それを鑑賞し、現代的意義をさぐろうとする、というようなことが出来ないか。

六月一日／臨書論／①－5

六月一日初めて臨書する、顔真卿の竹山聯句。この他に書いてみたい本を出して前の方に積んでおく。ボクビのカンゼン文、雑集、光明皇后の楽毅論。臨書というものは作者の人間性、世界のつかみ方というものを自己のそれと比較させてみる、勿論勉強の対象として取り出したからには自分以上のものが中にひそんでいるから持ち出したわけであるから、要するに自分をたゝせる為に臨書するわけであろう。そうするには先ず、そういう作者の人間性というものは形となって、外に、今眼の前に表わされているわけだから、その形を絶対、寸分も違わず真似するところから入らねばならない。真似するというと少々誤解が生じようが、とに角作者があとづけていった形というものを間違いのないようにたどってみることによって、作者の呼吸に近づき、その上で、作者の人間というものと自分というものとを対決させてみる、という筋が立つのではないかと思ってやってみた、が全然いけません。筆が、もう自分のものでなくなっているのだから。然し考えてみると、形を、そのあとを間違いなくたどってみようとした場合に、字の単なる「形を真似しよう」としていたところに間違いがあるようだ、第一、線が全然なっていないからだ。要するに、「線」をさぐらねばならない。そしてその為に筆を使う技術の修練、研究が一段と必要になって来ようと思う。形（線も含む）と、自己と、原本の作品の人間性とがまるで一つに合致した時、臨書のケツ作が生れ、そこに、改めて見た時に、無なった自己は脈々と自己を生きていると言えるであろうし、古典の作者は又、今そこに生きつづけるといえよう。すべてのものが主張が消えた時、すべてのものがそれ〴〵生きつづけると言えよう。ラヂオがガン〳〵鳴っているのでよみかえさず。めんどうくさい。サヨナラ。

【解】「三月十七日に退所してからもう二ヶ月と十日を経過してしまった。」と別頁に記されており、肺結核治癒の退所は、三月十七日。『白寿展図録』年譜中、子龍の手紙から、三月十八日としていたが、訂正する。また、この退所後、療養を経て、初めて筆を持って臨書に臨んだものと窺える。

日付不明（六月二日か）／**臨書論／①－5**

臨書は、原本の形を「守る」のではなく、自らその形の中で全く自由に臨書しているといったものだろう。だから、形というものは、古典の形と寸分違わないものが自ら生れ出るというものだろう。

日付不明（六月二日―十六日の間）／**墨人会批判／①－6**

墨人は決して居心地が悪いというのではない。現存する所謂団体の中では一番すみ心地はいいかも知れない。然し、あまりにも一方的に強く一つの方向に押しやろうとする何かがあまりにも強烈すぎる。非常な抵抗感を持つのだ。／書というものはもっと「静」というようなものだ。高姿勢でなしに、サッパリとした、ケロッとしたものだ、と言えないか。／対社会的な運動としては存在の意味をさがすのも無意味ではなかろうが、どうも俺には性に合わない。他の者なんて、どうでもよい。そんな連中に無理して自己宣伝してやる必要を思わないのだ。／自分で自分を生きる、そのことだけでせい一杯。小さい言わば言え。制作の本来の意味がないと人が言うならば言え、だ。どうも趣味に合わん。

六月十六日／臨書論／①－6

第二回目の臨書　35年六月十六日／墨美に出た「歓善文」を臨書する（註十六）。形式、方法、筆技にかかわらず、何かとても底から透明な大きなものがゆらいでいるのを見たからだ。これに比較したら顔真卿といえども矢張り型の中心でしか生きていないなと思った。が、臨書して驚いた。そうたやすくこの身をそこに投射出来ないのだ。簡単に受けとめてくれるであろうと、思ったのだが。こちらが裸になれ切れないからだろうが、その、裸になり切る為にこれを習うのだが。筆だけが空廻りする。イケマセン。最后に、数枚、竹山聯句を書いてみた、勿論まだ〳〵筆に呼吸が乗らないが、最初に見切りをつけたように程は、「型の中」ということは思われなくなって来た。何らかの「型の中」でしか仕事は出来ないのだからだろう、「型の中」に主動権があるのでなく、その型の中にあって動いている「我」に主動権があるという、そこのところをしっかり認識しなければならないのだろう。それにしても怠性で書けない、とは残念なりだ。

（註十六）『墨美』№62　昭和三十二年（一九五七）一月号「敦煌発見勧善文・東と西の書」と思われる。

日付不明（六月十六―二十一日の間）／**「墨戯」と「芸術」**／①-6

［「墨戯」と「芸術」との違い如何。］（墨戯と芸術を上下二段の表にして）墨戯／あそび／一人よがり／次元が低い／層が浅い層／（前掲の「次元…」と「層が…」とをまとめて）だというが、どう低く、どう浅いのか、／芸術／そこには作家の徹した精神が生れてこなくては駄目だ、と華岳は言う、感覚的にはわかる気がするのだが、何に徹した精神なのか。そして、その精神というものは、その作家の日常生活に、そして、又、作品に、どのように具体化されるのか、例えば、／芸術観の違いか。ではその芸術観とは何だ。両者に於ける「社会性」とは何か。

六月二十一日／**書けぬ草玄**／①-6

35．6．21．／臨書するつもりで毛センを拡げたら、大きな紙に急に書いてみたくなり、墨を足したり、筆を準備する。然し、その最中に、フッと不安がわく。何にも心の中に用意がないのだ、準備が出来ていないのだ。／どういうことをどのような出し方に於て書きたいのか。それが出来ていないというのに、こういうふうに、今、書いてしまっては、惰性の穴を益々大きくするのではないか、という不安だ。／書かない方がよいと思いながらも、墨のニオイ、筆の感ショク、紙の白さを見ると、やっぱり「まあ〳〵、試筆程度にやってみよう」と思ってしまう。これは大変危険なことであるし、又事実とても無意味以上の、障害になるような、それは、小さな観念のヒモをしっかりにぎりしめたような全く身動きの出来ない穴を掘った感じを持って、大失敗であったと今思っているのだが。／書けぬのだ。／当り前だ。何の用意もないのだから。／まとまり過ぎていかん。そして、唯、それだけで、中身が無いのだ。かなしくなってくる。／筆のせいか、字を小さめの紙に書いてみるが矢張り同じ、淋しなってくる。自分の芸術的才能をうたがう。／俺にはもう字は書けないのだろうか。全く淋しい感がして来た。／臨書をしてみても線が変にカスレてしまって、深まらない。深めようとすると技術達者だけの線になってしまって俺の影が薄くなる。俺を線の中に入れるにはどうしたらよいのだろう。俺が線の中に入らない。俺は今ここに生きていながら、生きていないのだろうか。俺は俺だという、その俺が無いのか。／良寛を手習いするべく筆を持っていながらムリなのだろう。

七月九日／**書けぬ草玄**／①-6

七月九日／作品が書きたくても書けないのだ。時間も無いし、更にもう一つ根本的な□（不明）を見失っているのだ。そこのところを探がし出さねばならぬ。それには矢張り何はともあれ「書く」ことだ。この俺に書くということを側面的に援助してくれないとは全く淋しいことだ。理解したくないと言うのだろうか、一番の病手だ。この「書けない腹立たしさ」を理解してくれないことは一番の病手だ。所謂、「気の生いた仕事」なんていう層では最早仕事をしたくないのだ。本ものの仕事がしたいのだ。ごまかしでない、当り前の仕事がしたいのだ。それには然し今の俺には、「形」が出て来たいのだ、眼の前に「俺の形」が生れて来ないのだ。この「形」が生れて来ない限り筆をとっても唯従前の惰性で、走りまわるだけで、全然無意味に空廻りするだけなのだ、「形」がほしい。形がほしい。出て来るにはどう考えたらよいか。子龍にはその「形」がある、有一の形は、あるにはあるが、もう一押し本物までには間がある。義道は形がない、様式がある、太にも、無い。才智はあるが、俺にも何もない。どうする、死んでしまえ。不甲斐ない奴。

九月七日／**筆作りと制作**／①-6

九月七日／古箒をほぐして筆を作る。太い筆がほしいのだが。「同」の作品、三枚目、何か出て来そうだ。太い筆がほしい。シュロ箒では、線の周囲のグチャ〳〵がいやになる。

【解】《同》は、未見。作品アルバムに無し。

九月八日／**墨の注文**／①-6

九月八日／墨運堂にスミ／六缶注文

【解】墨運堂とは、練墨の開発などで昭和三十一年（一九五六）頃、特に関係があった。

九月九日／**紙の注文**／①-6

九月九日／佐野商店に／紙注文、三反

九月十四日／**書けぬ草玄**／①-6

九月十四日、昨日書いて、今日書いたら、つかれました。全然出来ません。困りました。／左眼が何で赤くなったか、今朝から。／何か、細い細い線で、スカッとしたものと、めざして書いてはみるが、きびしい線が、スッパリ（ママ）引けない。細い線という「形式」しか頭の中にないようだ。あたり前の字が何の計画もなしに

書けないか。

九月十七日／良寛臨書／①－6

十七日、紙もまた、墨も到着していたが、どうもつかれたようだ。今日まで休み、昨日校正（ひびき十月号）したので、ねむたい。午前眠った。／己の字と切の字を数枚書いた。一寸面白そうなというものは出来ても、底なしのものが生れず、難産なり。然し、呼吸をセッパクした感情のままに空気のはき、すてが出来ないので困る。胸がやっぱりまだつかれるようだからだ。／筆を持つ（ママ）はじめ、（九月七日以前）画仙半分に「河」を書き「骨」を書いた。良寛の本をみながら。墨をしぼり、筆毛を深く鋭く、が目標であってもなか〳〵出てこないものだ。／今日、（九月十七日）は、これまで大部筆を休ませていたので、筆が半がたくにかたまりかかっていたので、それをほぐさずに書いてみたら案外面白い線が生れか、ったが、今度は、その、「面白い線」という所に心が止ってしまって中をえぐれないのだ。それを打破るべく、上からポトッと筆を垂直におとすように書いてみる「切」の字を。そうすると、又、やっぱり太い筆をほしいなと思う。俺に太いいい筆を持たせたら、という気持がでる。誰にも負けぬのだが、でも、やっぱり、そうしても、「墨人調」の中、そういう一連の中にはき込んでしまうだろ（ママ）。中身も見ずに。俺にはやっぱり太いいい筆のないところに俺の俺たる所以があるとも考えられようか。／「住」の半分を「白」の字とする。これで一応まとまった。こう長い日数をかけて見ていると中身が消えていってしまうようだ。またやり直すか。

【解】 記述中の「己」、「切」、「河」、「骨」、「住」、「白」の字は、いずれも良寛の書の臨書と考えられる。翌年の『ひびき』第六十（六十一）号に《清》（白寿p163、S36-3-2）および、《列》（同、S36-3-3）を掲載しており、この臨書の関連と思われる。

十月二十四日／『ひびき』専門部課題／①－6

ひびきの十二月号の専門部の課題に何か古典をきめて、それを臨書しなければ、と、ここ数日まづしい書棚ではあるが、法帖類をあさっているが、なか〳〵これといって気を引く古典が無い。／いっその事、所謂古典以外から見てみようと芋銭書簡集をひろげてみたが、適当に写真に出せるようなものがない。／「洗硯」の竹田の書もいいことはいいが、どうもこれは下手に臨書すると味に流れやすい。／いっそ王ギ（ママ）之とも思ったが、どうもとびつく気が起きないので困った。

日付不明（十二月十六日頃）／**高額書籍／①－6**

（貝塚茂樹『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字』と安田靫彦監修『良寛』の記事貼付有り。）十二月十六日上のように、「良寛」と「甲骨文字」とが発行になる。高価な本だ。一方が限定出版で、一万三千円。一方が、図版冊二巻、本文とで、二万八千円。とてもほしい本だが全然手が届かない。この頃、高価な本がどん〳〵出版されるようだ。いい本はみんな高い値段がついて出版される、といってもよい。安いのは所謂週間（ママ）紙的な内外ともに薄っぺらなもので、専門的に充実した本となるとどうしても高い本になる。これでは我々は何時になっても入手は困難ということである。人間が社会を形成…向上させていくことでありながら、その人間は、やはり「金」がなければ見たい本も見る事が出来ず、人間の意志は「金」をいうものの前に言っては全然その力を焼失してしまうという、全く、年の瀬、師走、という言葉をつくづく思うわけである。年中俺には年の瀬だが。

十二月十九日／「ひびき」発行の借金／①－6

十二月十九日、月曜日。味噌がなかったので醤油を、それも普通の分が矢張りストックが品切れになって、丸天の薄口だけしかなかった。それをそそぎこんで菜ッ葉を油でいためて、オジヤを作り、一口、二口、フー、フーと熱いのをほおばりはじめたら共和印刷（註十七）来る。／去年の八月から今年の八月までの間に十万も増加して、計、現在、五十万程の赤字と聞かされ、びっくりしてしまう。／宇子野へ薬を取りに行くのも行けぬという程にして、それこそ、本当に精一杯に生きているつもりなのに、どうしてこうもどん〳〵借金が増えていくのだ。そう、結局、一月号から単価を二十五円から、五円値上げして、三十円にすることにする。久之（ママ）から二百円借りて、葉書を四十枚買って来て、これで明日は第二回目の個人の督促状を出そうと思う。第二回分は五十枚程。今日、午前中に書いたのだ。／加茂川にツケモノの石をとりに行く。寒い風だ、どうして俺には、こうもツキが廻って来ないのだろう。これに負けたらまた病気になってしまう。が、それにしても元気が出ないものだ。とに角、俺は書かねばならない。この頃、またトンと怠惰になっているのだ。だから金にせめられて来るのだ。字を書かねばならぬ。「書」、この使命を忘れているところに、俺のスキがある。書け。書け、書け。金がなくても書け。それが俺の本当の仕事ではないか。頑張れ草玄。

（註十七） 草玄主宰の『ひびき』誌の印刷は、昭和三十一年（一九五六）の創刊号から同五十六年（一九八

一）の二百五十号全号、共和印刷による。

昭和三十六年（一九六一）

一月（不明日）／墨人会と草玄／①－6

その結果「群雄割拠」になってもいいか、一人、一人、墨人と草玄。

【解】（日付紙名不明）季節風、森田子龍「草がゆれている」と、（日付紙名不明）東大名誉教授矢内原忠雄「一人の価値」記事貼付有り。矢内原の記事を読んでの、自分の身に置き換えての記述と思われる。

日付不明（一月―二月二十三日の間か）／**墨人批判／①－7**

墨人誌一月号が送られて来ました。開通褒斜道石刻（ママ）の松本写真のページ、高橋蒼玄、吉田功の文章のページをパラパラとめくって通り過ぎると9頁に大きく森田子龍の「俎」の作品がある。どこかで見たような作品である。次のページでは辻太の「行」である、その次には、関谷様が「月例作品をみて」と題して作品批評をしているが、それらの二点は入っておらず、関谷様の文章の次のページに所謂月例作品の写真版が小さく出ている。先の墨人展（京都展）の時のものの一方の方の作品だろうが、こう我がもの顔に出て来られるとあまりいい感じを持たない。まあ、いいじゃないか。墨人会あっての個人ではなく、墨人会を一人一人が思い思いに、それぞれ利用したらいいのだろうから。／それにしても墨人会に自分一人が大きくのしかかって、その首座を示すようなそういういき方には、大きな抵抗を持つのである。／例えば先日造型新報という新聞の新年号には墨人会の事務所は現在辻太という岐阜であるべき筈なのに、椹木町黒門東入、となっている（註十八）。そういう姿勢は墨人会本来としても理解に苦しむ姿勢といえよう。篠田昭二が「名古屋展を迎えるにあたって」と題して書いている文章を読むと、何かしら口ごもっているもの、何かもう一つ奥に心を（不満の）蔵しているふうにミれるのは私だけのヒガメ（ママ）か。はっきり書けぬところに墨人の傷の深いことを思わせるのである。何としてもこちら側がいたって不勉強をただ省りみるだけ。

（註十八）前掲、昭和三十四年（一九五九）七月三十日の記述のこと。

日付不明（一月―二月二十三日の間か）／**類型ということ／①－7挿み込み**

類型ということ、良寛は道風の秋萩帖を習ったという。そしてカイ（ママ）素の自叙帖を習ったという。くらべてみると確かに共通点を（ただし、より多く形の上での）見出すことが出来る。そして更に考えを飛ヤクさせてみる。秋萩帖や、自叙帖に共鳴する良寛のような人たちが、数多く居ったとしてそれらの人たちが一堂に会して展覧会を持ったとしたらどうだろう、やっぱり、（以下無し）

四月九日か／第八回ひびき展／①－7

四月八日と九日、第八回ひびき全国展開催。来たのは、郡、大石、松下、井関校長、西田秀雄、だけなり。堀尾君が陳列にわざ〳〵名古屋から出て来てくれたので大変うれしかった。

五月十三日／「ひびき」支部の拡大と子龍とのすれ違い／①－7

5月13日、個人会員の中の学校関係の人達へ、往復はがきでいろいろ質問の葉書を出す。この中から少しでも支部が生れるといいのだが。どうしたら増加するのかトンとわからぬ。墨人で活躍したらいいのだろうが。それもいまのところ気がすすまぬ。／先日墨美の贈呈を受けその中の文から、森田様の父死亡を知り、手紙出す。けれども返事なし。黙殺か。カッテニシロ。

日付不明（五月十三日―八月十一日の間）／**不満居士草玄／①－7**

外に向っていろいろなことに不満を持つ。自分の身にふれるものすべてに対して不満の種になる。まるで不満居士だ。がよく考えてみると、この不満という奴は、何かしらアテにしているから、そして、それが自分の思うように自分のところにはね返って来ないから、不満が出て来るのだろう。そうだとしたら、アテにならぬことをアテにして、わざわざ不満を求めているようなものだ。とも言える。つまらんことだ。アテになるのはこの俺だけしかないのだから。その「俺」に向ってはウンと不満を持つがよい。そして、その不満の穴をうめるべく努力の積み重ねが、この俺に向って為されなければならぬ。だいたい、この俺が日々の生活をなまけているから、「不満」なんて、とんでもない、不必要な奴がとびこんでくるのだ。・・・と一応は理解するのだが、さて、実感として、この体の中から「不満」を放り出せないので困っているのだ。

八月二十六日／支払いと稽古場／①－7

八月二十六日、昨日も今日も振替入金なし。現在金二万程なり。紙がもう残

り少ない。合成接着剤も無くなって来た。三千円ほど必要だ。だが、九月号の発送ヒ、約七千円程が、ここ一両日にひかえている。それに、岐阜への支払いが来ている。それに二万は送金しなくてはならぬことになっている。瓦屋が修理に来ることになっているが、お盆前後といっていたが、もうじき来るだろう。それに最低三千円は必要とか瓦屋は説明していた。／（中略）／俺の働く場所が無いとは。いっその事、体の事も考えずにどんな仕事でもいいから、会社の守衛かなんかになって、とも思うが、何とはなしに二の足をふんで、勇気がくじけている。胸のコン跡があるので採用は不可能だろうということと、「書」と離れるようで、それで二の足をふむのだ。結局、俺に出来ることは稽古場を持つことだが、その稽古場が出来ないのだ。見つからぬのだ。見つけないからだともいえようが、では、どうしたらよいのだろう。積極的な交友関係を持たぬ俺の性格から来ているか。ザンネンなり。根は善良な一市民なのだがナ。

【解】大きな作品に向かい、太い線で書くために大量の墨が必要となり、前年九月八日記述にもあるように墨運堂に墨を発注したり、練墨開発を進めたりしていった中、墨の定着材である膠の代わりにより簡易に合成接着剤を使って墨づくりをこの頃から始めていることが窺える。

日付不明（九月―十月の間）／**絶対的な自己と作品の関係**／①－7

（日付紙名不明）「季節風　円空仏の本質」の記事貼付有り。それに対して）神を失ったというより神を信じないで、自己をのみ信じる現代人。そうでありながらその信じられなければならない己れという。自己はやはり「絶対」というところに居らないところに、現代人の「弱さ」があろう。私は、私の作品を書くことによって、絶対的な自己を見出そうとするのである。その為の労作であると言える、作品は。

日付不明（九月―十月二十五日の間）／**「呼吸」という言葉**／①－7

〝呼吸〟という言葉はよく使われる。「呼吸」、そうだ、正に「呼吸」だ。勿論生理的呼吸のことではない。生理的呼吸はどうしているのかまるでわからない。多分呼吸はしていないのではないだろうか。〝呼吸〟という言葉は漠然としているだけに、何か暗示みたいに、わかったような気になる。それだけに〝呼吸〟という言葉は適切ではないようだ。

日付不明（九月―十月二十五日の間）／**書と絵画との違い**／①－7挿み込み

書と「絵画」に於ける主体感と空間意識／立体感―実在感

日付不明（十月二十五日―翌年一月五日の間）／**書の美しさ**／①－7

書の美しさの位置／自覚（作る側とし）／（次の二つの項目をくくり）書にある美しさ／書にだけある美しさ／（二項目の下部に）美しさの類型／書／独自の構造につながる美しさ／書／ひっかく／刀でほる―印―てん刻／（刀でほるを指し）↑□不明□する意味／（印を指し）↑石碑そのものは書というのか／（印を指し）↑印そのものは書というのか。押したものは。／○文字を筆と、墨で書く場合、文字を書くことと形を書くことの違い／書／南谷さんが書と言っていること／「書と墨と紙でなければ書の美しさは出て来ない」→ということは逆に言えば、それが書の条件とも言えるのか。／筆の働きと人間との関係／筆の毛の働きの美しさ／墨―色の意味とは違った意味の対立／有と無の対立。―白と黒／白と太〝（の対立）／墨色、墨気（いのちとの関係）／（墨気を指し）↑形との関係／紙吸質性のタテ、ヨコ、深さの働らき具合／「人間の美しさ」―至言／それぞれの素材が美しく生かされているということは／に生きている自分であるから／（人間の美しさ）―○書の美しさにもつながろう。／文字を書いたもの／文学　絵との違い／大雅堂の書と画、雪舟の、白隠の―／線質、濃淡、／（書と絵を上下段に分け）書／一貫／力（精神そのもの）／骨格／絵／変化／情感／拡がりの方向／質に対する感覚／「白隠などは複雑さの困難さをよく知っている」ということ、単純、簡素ということは、その困難さを知っているから、それをさける為に単純に行くのでなく、複雑さ通って、それを乗り越えた時の単純さでなければならぬ。そこに「純粋」ということばの意味が出て来ないか。／「文字を書くことの自然さ」／筆順が出て来ないか／上から下、左上から右下への流れ／書の美しさは、境涯の美しさである／井島／いのちの問題／美、と装飾的な美しさとの相違、／作品は、いのちを求めていく、というものである。例えば、古典など、具体に則して書の美しさを一つ一つ論じられないか。／書と人間とのつながりは、書が芸術であればある程、強いわけ、しかしその場合、あくまで書一般の美しさと人間との関係を考えることと同時に個々の書に対する個人のその人間という関係をセンサクするのも一つの方法ではないか。／文字との結びつきが相対的になるか、自分の中にあるか。／井島／命ということは、単純にあるのでなしに外界と、何らかのものとのかかわり合いに於て、命というものがつかまれる。／芸術の場合の材料、土

俵（以下無し）

昭和三十七年（一九六二）

一月五日／墨人結成記念研究会／①－7

墨人会十周年ということで、誕生の場所、龍安寺に行く。有一、子龍、辻、関谷、華空、今岡、江口、おくれて、高橋蒼玄来る。ごったがえす龍安寺は、鑑賞出来る空気でない。十年前とは正に今昔の感あり。おどろきなり。

【解】 昭和二十七年（一九五二）一月四日、都合のつかなかった木子を除き、龍安寺に有一、草玄、大年、子龍が集まり、墨人会が結成されて以降、この日頃、同会の結成記念研究会が毎年設けられる。

日付不明（一月五日―三月末の間）／**「力」とは／①－8**

年令（時間）――境涯、然し「味の深さ」にはなっても、「力」ではない。ならば「力」とはどこから生れるのか。個の根元――生命――「力」、か。[力]＋時間＝境涯、か。（時間を指し）↑無為の時間でなく、歴史的時間展開していく時間なり。

日付不明（一月五日―三月末の間）／**絵と書の違い／①－8**

（S37. 3. 31消印、吉田功の葉書の絵に対して）絵というものは、こういうように何とはなしにも気軽に描いていける、然し書はこうは書けない。何が両者の本質にかかわる問題がひそんでいようか[図6]。

四月七日／山崎豊子『わが小説』を読んで／①－8

作品に於ける「力」の空想――人間。そして、その持ち出し方、――表現。

図6　吉田功葉書裏面頁

五月二日―二十日／《侶》の出品／①－8

主十七年五月二日　羽田空港発にて森田子龍渡独（註十九）。／五月十二日、久方ぶりに東京展出品と決め、ようやく本田から制作。／十三日に出来た「侶」を出す事にする（註二十）。／五月十九日　午后二時半〝第一淀〟で今岡さんと共に上京。九時頃有一宅到着、南側庭あり、うらやまし。／二十日は午前中今岡さんの作品張り。／午后、いわゆる湘南海岸散歩。ステレオを聞く。序破急ということ、バッハのこと。シュバイツツァー博士のパイプオルガン。音楽というものもなかなかのものなりと、何かはじめて知りかかったようなり。最後の雅楽またよし。越天楽のトギレ〳〵の音調。（ここまで鉛筆でつぶして有り。）／どうも、こんなふうに日記ふうに心覚えを書こうとすることは誠に苦手なり。何か、こう、書いてしまって、さて更（ママ）めて読み返してみるとまるで砂をかむみたいに、何の面白みもなし、中止、々々。

（註十九）　子龍は、四月十九日―五月二十七日、ダルムシュタット市での「現代日本書道展」での講演と揮毫のため五月二日発、二十六日帰国で渡独した。

（註二十）　五月十三日に出来たとすると、展覧会まで日数がないが、この年の東京展だと、「結成十周年墨人会・草人会連立展」に出品の《侶》（白寿p164、S37-90-1）と考えられる。

七月十日／書に於ける静かさと虚無／①－8

（紙名不明、荻原井泉水「大泉園随談」記事貼付への書込）「書に於ける静かさと虚無」

日付不明（九月頃か）／**無について考える／①－8挿み込み**

龍安寺、石が無を表わしている。＝ここに今日のアブストラクトとか前衛の芸術ののつけ所。／表われたものが表われるものを表わしている。表われたものが表われたものを表わしているという、つまり、有が有を表しているのでなしに、有が無を表わしている。／空白、白紙に主体がある。無が主体。／我々自身も写してはいない。私は私でなくてはいけない。その私はどこから出て来るか、自由な私、一切の外のものから脱却してしまって、そこから働き出て来る、躍動して来る。／そこでは必ず個性というものが出て来るし、それは、無と一体化、それを根底して、個別的なものとして、有として出て来る。／落着き＝働きというものと離れた落着き、それは働きを阻害する。厭世的な落着きがそれである。これは働きの根底というものになって来ない。／人間／（次の二項目をまとめて）深い土の、限りない静かさ　落着き。／天に誅する、怒濤の活躍、動き、働き。／東

洋、無／西洋、有／ただ有を否定するのではなく、有という限定されたものでなくなってくる。／肩の荷を一切下ろした、「あらかさ」／落着きというものは形が無い。／〝他〟の問題／他は他を呼び、他になり、他に分裂する。分裂すればする程意志というものが無くなる。いそがしいということは他である。それは益々他になって行く事である。主体性を失くする、だから肯定すべき方向ではない。自己喪失、主体性の喪失。それは近代文明というものの一つの宿命的なものといってもいい。／単純―落着ける。

九月十五日／無について考える／①－8

37．9．15．／久松先生の全書研に於ける講演のテープを取る。〝無〟とか、〝静かさ〟という事についての話は、大変勉強になった。俺の考えていたことに一歩先んじられてしまった。こうなったら、無理やり有に相対的な無の立場から、無を考えてみるか。

十月三十日／森田子龍「人間と力」を読んで／①－8

人間と力／37．10．30（展覧会も終って。森田子龍の〝骨・芯〟（註二十一）を見て）人間の生き方というものにはいろいろある。必ずしも力の太さだけの方向に方向づけられない。肯定的な力と、それと全く反対の否定的な力、力が消えてなくなる力という、〝融けた力〟とはもう一つ別な否定的な力もあってもよかろう。人間が生きるということ自体カイギ以外の何ものでもないとすれば、力も又、否定されるべきものであろう。

（註二十一）　第十五回墨人展（十月二十七日―二十九日、京都市美術館）の最終日、会場で語ったものが、『墨人』№115「骨・芯」と掲載有り。

昭和三十八年（一九六三）

日付不明（一月十三日までの間）／**自己を省みて／①－9**

気分本位の反抗。強情で、ナキ虫で、クヤシガリ屋、ヤキモチ屋で、ダラシがなく、カザリ屋で。

日付不明（一月十三日までの間）／**矢内原伊作「ピカソ・ゲルニカ展に寄せて」の記事の感想／①－9**

こうしてピカソに感心せず、ゴヤのような苦悶なり、須田国太郎には苦渋があるといって感心し引かれる。／ところが、書に非情を見、平明を考え、非個性的なものを望む、この矛盾はどういうことなのか。／（日付不明朝日新聞、矢内原伊作「ピカソ・ゲルニカ展に寄せて」記事の「良心と芸術との対立ではなく、ひとつの魂の苦悶（くもん）があるだけである。」の部分に対して）作品が、言いかえたり作者が一つの大きな問題をかかえ込んだ時は、こういう在り方以外には方法がないと思う、人間が人間の内面に深まるからである。ところがピカソはどうか。人間を人間の外で象徴的に、冷徹に、非情に見つめているボウ観者、と言ったら言い過ぎになるか。／（同記事「傑作」に対して）ケッ作とも思わず。／（同記事「ピカソの天才」に対して）確かにピカソは天才かも知れない。／（同記事「迫力にみちて」に対して）迫力にみているとも思わず。／（同記事「現実をえぐりだす造形力」に対して）そして、造形力はあるかも知れない。／然し、果して、「現実をえぐり出す」造形力であろうか。／一人の人間が何らかの問題と対決した時、その問題と対決している人間の状態、つまり内部構造をさらげ出す場所が芸術である。／何らかの問題が、芸術のヂャンルの分れめであり、テーマなりモチーフの生れる場所である。

四月十一日／子龍への不満／①－9

決して、必ず来て見てほしいとも思わない。が然し何かシャク然としない心なり。／以前に一度、上位の作品だけを僕の二階でひろげて見たから、会場ではもはや見なくても判っている、というのだろうか、それならそれでよい。いそがしくて、全くの寸閑なしというのだろうか、それならそれでよろしい。／結局腹を立てるだけ損である、あれこれと思いめぐらすだけ無駄なことかも知れない、本人はそれですまし込んでいるのだから。／然し一応の儀礼的にも来てもよいだろうと思う。自分の為にならぬ事以外はさして重要視していないらしい、そういう非情さがある。／肌当りは一趣、微妙な、人を引きつける魅力を持ちながら、探れば探るほど我執の強さ、非情の男の姿がバクロされる感じである。底が見えたり。底深く見えるのは実は我執の強さのよどみなりと見たり。38．4．11．

【解】　四月九、十日、第十回全日本青少年書作品展覧会（ひびき全国展）を京都市美術館で開催しており、その同展に子龍が来訪しなかったことへの不満と思われる。同展は、昭和二十九年（一九五四）、書教育学会主催で始まっており、草玄が同三十一年三月に『ひびき』の主宰となった翌年の第四回展から同展

の主幹となって開催した。『拙「ひびき」十九』参照。

四月二十八日／自己を省みて／①－9

四月二十八日(中略)三時半帰宅。(『ひびき』)五月号の発送。荷造りの残りを荷造りして夕食。／夜、墨人の四月号を読む。塩野さんの編集。批評の塩野さん、彼はやはり作品と真剣に取り組んでいることが文章の間から脈々と伝わって来る。／――「骨、芯」を読んで――という文章も感動しながら、最后まで読んで、驚いた。(以上、鉛筆でつぶしてある)／どうも、俺はヒネクレ屋だな。もっと大きな世界観の中に住め。そして、まともな勉強を続けよ。

五月二十日／格に入って格を出る／①－9

38．5．20．／「格に入って格を出る」／〝格〟に入らなければ、〝格〟は常に自己の対岸の相対的な位置にあることになる。／相対的に〝格〟である間は〝格〟でなく、単なる障害としてしか見ることが出来ないであろう。／筆にしても、筆をただ眺めているだけでは筆の意味も眺めているこの〝自己〟の意味も出て来ないし、何らかの働きを働こうとしつつある自己の働きさえも出て来る筈がない。筆を自己が手にとって、はじめて、筆を扱うことが可能になって来る。／つまり、筆を使うということは筆を手に取ってこそ成立するのである。／しかし、〝筆を使う〟ということは、使う側、つまり、こちら側の人間に主体があるようであるが、実はやはり主体は〝筆〟自体の方にあると言わねばならない。／ところが、〝筆を使う〟ということは、さらには、〝筆に生きる〟という場の生れる素因を持っている。〝筆に生きる〟という、ここではじめて、筆は使われ、主体的なこちら側が筆を使うという、能動的なものが生れて来る。／ここでは実は筆という、一つの格に入っておりながら、しかし最早、〝筆〟は消えて、筆を生きている自己の能動的な生命だけが脈々と脈打っているのであって、つまりこれが格を出ると言われるところであろうと思う。／具体的に、何らかの門をくぐり入って、そして又、その何らかの具体的なものをぬけ出るというような、格に入って格を出る、というようなものでなく、常に何らかの具体的なものとのかかわり合いでなければ生命の働きようも、また、生命それ自体の認識も出来ないという意味で、格に入る必要がある。と同時に格を出るという時の「格」も「出る」も主体の転換というか、ものでありながら、ものでなくなる。／格が格である時には格を出ることは出来ない、「随所に主となる」ということになってはじめて格を出る、ということも言えるのであるが、／この場合、主となったのであって、格を出たのではない。結果的には格の中におりながら格が消えて能動的な主体だけがあるのである。

六月十六日／書は深くきびしいもの／①－9

六月十六日から新宿伊勢丹で開かれた三十人展(註二十二)を見て、「書はもっと深くきびしいもの」の筈だということをしみじみ思った。／ムードはあった。さわやかなもの、あざやかな筆の扱い方は見れる、が、果たして書とは何か。

(註二十二)　現代日本書家三十人展、六月十六日―二十三日開催。

七月九日／一度きりの今／①－9

焦っては行かんけれども「今」は二度とないのだ。くり返せないのだ。三十八年七月九日―十日、一時半

日付不明(七月九日―八月二十九日までの間)／**自己の自覚／①－9**

森田子龍は書に対して及び、書の運動に対して積極的な能動主義者である。／俺は停トン、消極主義者である。／それは森田子龍が書に対する「自信」を持っているからである。／俺には(二重線で消しているが記載)書に対して「自信」なし。常に「判らぬ」からである。／そして、その自信はまた人生に対する自信でもある。人間に対する自信でもあり、己れに対する自信でもある。俺には俺は自信をもっておらぬそういう己れの俺である。

八月二十九日／《恵》と《天心》／①－9

(潰してあるが記載)八月二十九日。午前中稽古を済ませ昼食にスシとビールをつめ込んで張り切ったが三時過ぎまで昼寝。／一昨日〝恵〟を書いてみたが、何とかなりそうなので、昨日一枚持ち帰って〝天心〟と比べて見た。いけそうな気がしたので、今日も〝恵〟だけを書いた。が、どうもやっぱりいけません。

【解】　同年十月二十六日―三十日開催の第十七回墨人展出品の《恵》(白寿p166、S38-10-4)の前段階と思われる。また、《天心》も翌年発表する(白寿p167、S39-7-3、当館蔵)の前段階と思われる。

八月三十一日／《恵》と『ひびき』競書審査／①－9

三十一日　昨日一日行かずに、一昨日の分を放りっぱなしにしていたら、すごい雨だったので雨とススでいっぱい。／やはり〝恵〟を書くが、どうも鈍重になっ

てしまうようだ。全体に力みすぎている。というより、体の方に力みすぎがあると思っていたら、／一日、朝、競書を審査していたら急に右背中の筋肉が突張ったようで、呼吸を深くすると痛くてたまらなくなる。／一美にすこしもんで貰う、午前中で審査を完了し、午后、宇子野に行き、馬渕様と碁を打って半日遊ぶ。／自転車で往復は爽快也。

【解】 競書の審査は、『ひびき』七月号分の審査（八月二十日締め切り）。

九月三日／制作における形と構成／①－9

制作ということは、見えないものを、見える形に持ち出すことであるから、形は大事なことである。形を書いているのであるから。／形はコンポジションでもあり、構成でもあるから、形づくるという意味で、構成ということは欠くべからざることである。／ところが、どうも、形を書いていることは確かなんだが、形を書いているのではない、といった方が真実のような気がする。／或る、何か、体の中に内在している、ウネリのように動きひしめいている、思念といったようなものが或る言葉の上に重って、その言葉を自分の中に限定した時、書を書くということの出発点に己れは定っている。そして、その言葉は或る共通の形を持っているのであるから、先ずその典型的な、一般的な形の中で書こうとする。この場合、形が大事でなくてその形の持つ意味、即ち言葉としての点が大事なのであるから書かれる形は歪まない。／ところが、書き上げて見ると形がまとまり過ぎて、面白くない。質的、内容的には或る程度含むものがあるようでもあるが、然しそれさえ生まに感じられて来る。しらずしらずの内に／平でな形、典型な形というものにやはりしばられているのであろうか。形が主でないのだから形を気にしない、という、そのことにやはりすでに拘束されてしまって、いるのかも知れない。次は形を破ることから制作が開始される。／ところが、また、その〝破る〟ことが面白くなって、ついには変な、いわゆる〝構成〟というようなことがチラリチラリと頭の中に出て来て、それの制作心を刺ゲキする。もうその時は〝破る〟でもなんでもなく、破るというそのことにまたしばられてしまっているのであって、線の内容も何もないものになっている場合が多い。／これではいかんというわけでまた、形よくも中身に重点を置くことにして、仕事をはじめる。形と中身との間を常にぐるぐる廻りながら何時かはその二つが一つになって出てきてくれることを希いながら筆をふるい、紙を無駄にし、時間を喰っているのだと言える。／応々、構成ということが口にされ構成することがつまりは作品をすることであるといったふうに考えられているようであるが、決してそうではあるまいと思う。／38．9．3．／十月号の編集をしつつ、谷辺様の〝わが作品〟を見ながら読みながら（註二十三）。

（註二十三） 『ひびき』十月号掲載、谷辺橘南「わが作品(9) 歌書一体 小色紙」の仮名作品と文章。

日付不明（十一月三日―二十一日までの間）／**荒々しさと洗練／①－9**

十一月四日の読書欄に〝演歌の明治大正史〟というのが□□（不明）されていた。／明治も二十年近くなると、自由民権の風潮が下層にもひろがり、「演説なら歌をもって」政府をやっつけ、世相をなげく「演歌」があらわれて民衆のりゅういんをさげた、のだということである。／演歌の歌詞は、あらあらしくて洗練されず、その節も、うたうというよりは、どなるといった方がふさわしいものであったが、七五調で歌いやすく、演説とちがい、たれでも口にすることができて、民衆自身のものになった、のだそうであるが、我々の今書くところの作品があらあらしく、書くということよりも、あばれるといったようなものになっている場合が多くとも、というようなことと一寸似ているようである。しかし、最近は、自覚しない連中は、単に、あらあらしさが目ざされたり、あばれることが目標であるような書きぶりをしている者が目立って来たが、本末テン倒もはなはだしい。／また一方、洗練されることに急であってもいいものかかどうかという問題もある。と思う現在の風潮でもあるようだ。／また、――演歌も、最初は壮士節で、本を売ることなんざ二の次で、いいたいことを言うのが自明であった、それがいつか書生節になり、本を売るのが目標になった。職業化し、同時に批判精神も薄れて行った。それが現在では、〝流し〟になって、芸術化してしまった。さびしいことだと、著者の添田知道は言っている。／私がこの問題に対して何かもたなければならないのだ。あの時いろいろな問題が出たと思うが、どのような問題が、どのようにそれ〴〵の人たちにくばられたかは知るよしもないが、とに角、私にはこの問題が手渡されていた。だから私はこの問題にだけ限定して答を出せばよいのである、しかし答は出ぬと思う、ただ私の考えを書きつらねればよいのだと思う。

日付不明（十一月三日―二十一日までの間）／**私／①－9**

人間の底には無限のものが蓄えられている。／◎然も私が私のそしてそこに言ってくる私は単に或る一つの地点まで達した孤独というような私でなく、し

かし、ことに安住している私でなく、私は更に私を越えでた私になろうとしていることをそういう／他との交渉／共感とか交流とかというものを越えて（以下無し）

十二月二十一日／良寛、白隠、慈雲／①－9

38.12.21.／良寛の作品は、見ていて、実にいいと思う、そして書いてみようという気持になる。そして、臨書していて、その為の苦心をしていても心楽しい。／白隠や慈雲の作品を見ていて強く打たれる。／然し臨書してみようという気持にならならない。いや、率直正直に言うなら、書きたい。書きたいのだが、書くことが何かバカらしくなってくるのだ。白隠なら白隠、慈雲なら慈雲の方法で書くことのバカらしさである、その奥を書かねばならぬからかも知れない。／また一方、光明皇后や聖武帝のものはすごいと思う、そして書いてみたくなる。勿論、書いたってその足許にも及ばないが、しかしやっぱり足許でもよいから寄ろうとして書く。／これが一体いいのだろう。そして、どういう理由で、そういうことになるのだろう。本質的に。

〈昭和三十九年（一九六四）―四十年（一九六五）の手帳、ノート類は無し。〉

昭和四十一年（一九六六）

二月九日／木喰彫刻展の感想／②－1

駅前のマルブツで木喰彫刻展を見る。柏崎のものも多数来ておって、何かしら柏崎の空気をすった思いが、して来る。十全堂とはエンマ堂のことか。そこのビンズル尊者の像とか、ソウズガバ像は好きであった（註二十四）。／中村藤照とはどなただろう。そこの道元禅師像も、ほしくなる像であった。／民芸館の地蔵菩薩像も、いいお顔であった。／小千谷の小栗山観音堂の、如意輪観音や大黒天、それから、焼津、十輪寺の子安地蔵もいい作であったが、新潟県真福寺の仁王像二つ、（阿）ア、（吽）ウンの巨大な像には驚いた。真福寺とは一体どこだろう（註二十五）。／円空とはまた違ったものを持っていて、この頃の薄っぺらな前衛ものよりグンとよいのは面白い。ま、比較するようなことなんかできぬのかも知れぬ。民衆宗教というか、高級でないところにもやっぱり根のあるものがあるということなのか。

（註二十四）木喰仏の頻頭盧尊者と葬頭河婆半跏像。現在、柏崎市関町会館内の十王堂に安置。

（註二十五）現長岡市小国町の真福寺の木喰仏の仁王像。

二月十日／文字の持つ〝心〟を書く／②－1

文字の持つ〝心〟をかきたい。文字は人間の歴史の中で、歴史を持って生きてきている。一つの人間の歴史の内容が加重されて生きて来ている。その〝心〟をかきたい。自分という個性なんかその前に立ったら全く無力化してしまう、と思っている今の俺である。

二月十五日／《風無門自開》の感想／②－1

大丸での第十回毎日選抜美術展を見る。「門自開」の三点しか結局は陳列しなかったが、蛍光灯下では、どうも紙の白が張り切らぬものだ。それに作品間をもっと空けたいのだが、ひっつきすぎていたのも、いけなかったようだ。

【解】出品の「門自開」が、《風無門自開》の（白寿p167、S39-10-3）か、（白寿p168、S40-10-1）のどちらかは不明。

二月十八日／『ひびき』関連依頼／②－1

朝9時新幹線で上京。小林龍峰氏宅訪問。御次男、小林隆氏、去る二月四日の全日空機ソウ難事故で死亡、霊前にぬかずし。〝ペン字二週間〟［図7］の諸件、その他の件で話し合い、依頼。／（中略）／民芸館は一、二月は休館の為、9時半頃、上田桑鳩氏宅行。ひびきの専門部用の臨書を依頼。／帰り、代々木上原にて下車、手島右卿氏宅行。電話したら鎌倉行の由、すぐウイスキー持参、玄関で帰る。／今日は土曜日なので超特急券、2時半まで無し。／（中略）／書に心酔する人。そして、書を馬鹿にして、その馬鹿にしたい〝書〟から離れないでいる人。

【解】この後の旅程は不明。小林龍峰の『ペン字二週間』は、『ひびき』誌で昭和三十八年（一九六三）年六月号から翌年十一月号まで小林龍峰が担当して掲載した「十四回でマスターできる…硬筆書写講座」を同誌の発行所の日本書道学舎（草玄宅）から昭和四十年（一九六五）一月十日発行し、ひびきの会でも利用していたペン字の学習冊子［図7］。また、

図7　小林龍峰著『ペン字二週間』日本書道学舎発行

墨人会結成時脱退した桑鳩との交流再開は、昭和三十九年（一九六四）十一月頃からで、『ひびき』誌専門部の桑鳩の臨書掲載は、翌年一月号から始まる。直近で桑鳩の臨書が『ひびき』誌専門部に掲載されるのは、同四十一年（一九六六）七月号の空海《風信帖》第三の「留意相待」部分。『拙「ひびき」十九』参照。

二月二十日／無駄／②－1

すべて〝無駄〟のことだな。然しその〝無駄〟がとても必要なんだな。〝無駄〟があるから人生が生き生きするんだな。無駄のない人生なんて、見ちゃおれんな。／子龍は動物質、草玄は植物質、か。

昭和四十二年（一九六七）

一月四日／墨人結成記念研究会／②－1

午后1時半、大賀屋旅館へ集合。墨人会結成十五周年。有一は明日到着予定。辻様は父君死亡の為、欠席。新会員樋口君も一緒で総勢8人で龍安寺行。石を見ずに、森田子龍好みのところで命名したものだなと思っていた。俺ならどこを選ぶだろう。たぶん飲み屋かな。有一ならどこに行くだろう…なことを考えていた。

三月三十日／個性／②－1

クリスチャンアカデミー　アカデモス（森）／中世の美術　［乾］／・超越者、神への奉仕／・手仕事（上記二つをまとめて）統一的であった。／近代では〝手仕事〟が〝労務〟になり、〝分烈（ママ）〟し〝人間〟への自覚／〝個性〟の問題／〝芸術観〟／作家根性／「〝個性〟を消す」ということ、客体に対する〝自分〟。個的な差異はあっても、自己主張しようとする自分と、溶けた□□（不明）性の自己との間にある自分。／未来と現在。／未来は現在に於てでしか出て来ない。〝新しい〟ということ、未来だけの場合、現在に立った場合。／十九世紀的だな、我々は。然し、その時に、単なる十九世紀的でなしに、未来を考える故に個性的でなくたっていいという意味で。自分の中に大きな穴がだんだん開（あ）いて来ている。それをうめる為に一層我々は作者を作り、作品を作ることで、その穴をうめようとするのだが、うまらない。／虚コウ、フィクション／制作したあとでは何時も思うこと、そのフィクションの中に統一的な実体がほしい為だ。

〈昭和四十三年（一九六八）―四十五年（一九七〇）の手帳、ノート類は無し。〉

昭和四十六年（一九七一）

日付不明（三月十三日―六月六日の間）／**書の完成度問題／②－1**

夏目の二つの作品の一つを完成度が［高い］、とし、一つをそれよりも［低い］とする、その区分は、内との純度と言っても、その内なる夏目の表現意志をどのようにして切り開いて見るのか。／あくまで、それを見る森田なら森田の、江口なら江口の観る立場での目でしかなかろうと思う。／にもかかわらず、その区分をすることの安直さ。／［完成］の言葉の持つ語感（できている）との違い。／芸術至上主義（？）だと「完成」が絶対必要になってくる。／俺は人間至上主義。／人間に埋ボツしきって、そこで人間のクサミをかぎたい。／そう人間が或る時、或る場所で、（書という）現象化する。そのことが俺にとっての制作の内面構造。

【解】子龍との完成度問題論争で、子龍から『墨人』第百九十号（同年二月二十五日発行）で「表現とその完成度」の反論を受けての記述と思われる。その詳細は、拙論「江口草玄における書の〝完成度〟について――草玄・子龍の書の完成度論争」『新潟県立近代美術館研究紀要』第二十号参照。この日付不明記述で、子龍との違いを草玄は、「子龍は芸術至上主義、自分は人間至上主義」と要約している点にうなづける。そこに両者の相いれなかった仲違いの一要因が裏付けられる。

日付不明（三月十三日―六月六日の間）／**純化と自由／②－1**

近代の虚偽から自我をいかにして奪回し純化しうるか、そして、純化された自我が当然まとわざるを得ない反社会性を、いかにして人間の「自由」という課題に積極的に結びつけうるか。

日付不明（六月六日―七月三日の間）／**現代と書／②－1**

［これは、いいかっこうした、利巧そうぶろうという、まことに下司なコンジョ（マ）ンなんだ。］／「現代性」という主題を聞く時、どうも私には、その「現代」なる語が、自分の向い側に存在して、その向い側に在る現代を先取りしている気配がしてならない。向う側にある「現代」が問題ではなしに、むしろ問題は、そのようなことを問題にしなくてはならない、自分というものは一体、何かということが先ず第一に問題として考えられなければならぬと思えてならない。／意識するとしないとにかかわらず、是（こ）の自分というものは正に現代に於てでしか存在しな

い。故に、先取りした「現代」ということを考える前に、もっと考えなければならない主題があることを明確にしていなくてはいけないと思う。つまり、今、生きる己れとは何かという問題である。どうも、西洋の論理形式で曰く不可解な人間の中身を明確に分析しよう(と)(久)しても、それは所詮、乾いた、ものでない。ところあたりがいわゆる東洋的ものの考え方と西洋的ものの考え方の分かれる所以かとも思われるのであるが、とに角一本の線を取って来て考えたり東洋の場合、その線自体に意味を持つのである。その線は人間の生、生命に言った、そして、生命というきれいごとでない、人間の心という、かげりのあるところから発した線、つまり、だから、東洋に於ける線とは内から発するというものである。西洋の場合、外を明確に分離する一つの手段である。即ち、外から見る論理／形体としてとらまえているのではなかろうかと思われるのである。「現代」とはいわゆる「効用」というふうに早くつなげていないだろうか。書をやることが現代にどのような効用効果があるかということと同じでは困る。

日付不明(六月六日―七月三日の間)／**講演会草稿**／②―1

大馬鹿野郎、それを聞く諸君も大馬鹿野郎／言葉表現の幼稚、拙劣、体験の狭さ、そんな私に「現代性」とか、「書の鑑賞法」という大きな大事な問題を出されても、これは困却以上／省みて他人に意見出来ない本人もいかに苦しんでいるか、言葉にならぬ。／皆さんの貴重な時間が、一変して、全く無為な時間になるであろう。／極選(ゴ)／ここに言った以上。／良寛のオイへの意見／[涙]／私はそうはいかないので、ダラダラとこれからモノ言っていくことにする。／[A]／私の体験／キッカケ、昭十一(ママ)年、カリエス死、コン跡を残す。／競書雑誌を取っては止め、「書道芸術」が最後に残る。といって、直接、上田、手島、大沢雅休等を尋ねる心臓も田舎者にはなかったので、神田の古本屋街をさまよい歩く。／なけなしの金で、法帖をさがし求め。(一冊)／一般的な評価には耳をかさぬ。(文検)／自己の目で見る／灌頂記を入手した時／大日経開題、灌頂記、光明皇后楽毅論を見た時の透明感。／二十五年、日展入選。／二十六年、特選。／二十七年、師と分かれ、墨人会結成。／以上のような過去の状況をふり返って、今思うに、他人のことに目をくれず、自分の好きなことだけ、自分を主にして、言うならば、大変おこがましいことであるけれども、主体的な自己確立が、無意識の中で働いていたと思う。／書くことの楽しさ、線を引くことの楽しさ、それがなかったら書なんか、止めてしまえ。自発的な、能動的。受動でない。／現今、書は盛んであると言われている。現に、このように皆さんの、書に対する熱心さを見ることが出来るのであるが、反面、一まつの不安、不満がないこともないのを消すことができない。／或る大学の合宿を見た時、臨書手本のシキ写しをやっている(ロクでもない手本)。大人の書家も悪いが、何とそこに習おうとする若い人も何とそこに主体性のなさを、なげくのみ。日展の現状を見よ。「金」で買える。芸術の場面ではない。相手にしなさんな。師匠でもそうだ。(桑鳩の臨書場所を臨書しなかった。)／真似、テライ、模倣／↑反発すべし。外にも自己にも。／書の根元を考え人間の生の根底にかかわる書を考えないような師匠は師匠でなし。こちらからお払い箱にすべし。／地方名士になれる日展や、御家流とか、寺子屋から出発した技の伝授形式が、書の人口を確かに多くした、が、書それ自体の心を見失わせしめた事実を今こそはっきり認識すべきであろう。／それらのラチ外で仕事をしていた。例えば、白隠や、慈雲、良寛、と日下部鳴鶴／私がこの系列なので。他の系列からは例を出さぬ。―やと比較してみよ。／書の技、筆の巧みさはあっても、それを支えて、書たらしめている。世界観のあるなしであろう。／自己の主体的思想なし、これでは、口にいかに書のことを言っても、まるでトーフみな(ママ)いなものでしかない。筋金がない。／人間、カタブツではいかん。酒が好き、女が好き、それを正直に生きる。／その筋金は、どこから生まれるか。／主体的人間の心のヌクミがまつわり合い、かかわり合って書となる。という自覚。書と人間とが、不離不ソク。／ある時、新聞にこんなことが出ていた。／①芸術とは正に、この「ふらつき」の心情だと思うのです。例えば種田山頭火という俳人／明治―昭和／「どうしようもない私が歩いている」。／自分自らを[省み]なくしては、その「ふらつき」は出て来ないものである。その「ふらつき」があるからこそ人間の心のヌクミということがあるのである。その「ふらつき的ヌクミ」こそ、外に行為として定着させる原動力になっていくものである。つまり、自己に自ら問題をぶつけ、ぶつけしている中で固まり(タマリ、ヨドミ)を作るのである。「ふらつき」を脱して、その「固まり」が「固まり」になった時に、内に主体性が芽ぶくのであろう。／その芽ぶきは、外に持ち出さざるを得ない力になるというものであろう。／これが、内なる、人間の心と外に定着される芸術というものの関係ではなかろうか。／人間の命の本来性「前向き」――死を目前にした子供の勉強／「今日一日」／書とは知識ではない。自己の根底と、外の現実体験とのかかわりに於て生まれるもので、そこには殊更の、意識された「新しさ」も「古さ」もないものと言わざるをないものであろう。／世阿弥の今に生まれる所以。伝統／自分に於ける書は、あ

くまでも自分に於ける書で、他の何人（なんぴと）と言えども立ち入ることは出来ない。まして、自分の書を他人から借りて持ち込もうという姿勢は、でんで問題にならないのである。／（※「書の鑑賞法」にしても、それは何時でも、個に於けるそれでなければならない。／つまり巻頭に「私に於ける」が入らねばならぬ。然しそれを聞いて何になるか、他人の目を自分の目とサクカクしないこと。苦労しないことをでは困る。頭は。／ふらつき的ヌクミ、外に持ち出さざるを得ない、きびしさを持った一人一人の中に、一人一人の人間としての生に立脚した、人間の心の原点に立ちかえることの必要性を今こそ思う。／「若さ」はその上にさらに有力な特権的な力となるであろう。皆さんに期待する所以である。

【解】 講演の草稿と思われるが、何のためのものか不明。ただ、同手帳②－1の本記述の次の頁に「京都学生書道連盟」の記述および、同年七月三日、龍谷大学学友会館に行った記述もあることから、同大学での講演の草稿の可能性有り。

八月一日／墨人会活動／②－1

・同人同志の審査、復活―公募、1人のシジ↑同人作モアリ。・地方展の復活／・合宿の存否／・機関誌／・企画が何時も思いつき、その場主義。／［・同人同志がもっと噛み合わねばいけない。それでないと会としての魅力が出て来ない。］

日付不明（十二月七日―翌年二月二十七日の間）／批判精神／②－1

〈はみ出し〉の意味性／いわゆる権力者と等質の、いわゆる〈良識〉しか持たない場合の悲劇は、戦時中に経験ずみである。はみ出たところからモノを見る目というものを失っては、モノの、側面も含めての全部も見えないし、批判精神は生まれない。／この〈批判精神〉が、いかに現在及び、将来というものに対して意味があるかということを忘れてはなるまい。単なる批判精神は、肯定にしても、良識からはみ出したケタ外れの目で見るその目を、ばっさり切ってしまうようなことではいかに口にきれいごとを言ってみても、大きな危険があることを気づく必要あり。

昭和四十七年（一九七二）

二月二十七日／戦後という言葉／②－1

週刊朝日3月3日号を見ながら、モンベーズの親父の言を思いながら読書会のあと、愚人会のコンパに出席して、ひびき、3月号の校了を午前1時（2／28）郵便局へ、雪の中を投函して、熱カンで一杯やりながら。／〝戦争の〟（ママ）〝重み〟／〝戦後〟の〝重み〟（上記二つについて）異質、だな。／然し、それぞれ、そのまっただ中にあった時にはつかめなかったことという意味では、〝戦後〟も今日的でない。／それ以後の意味になってくる。／〝戦争〟と〝戦後〟を通過して今日現在があるのではないか。／その内部沈潜したのか、又は外部風化したのか。／〈〝戦後〟の意味を問う美術展〉として、東京国立近代美術館でシリーズ第一回〈戦後日本美術展〉が開かれているそうだ（3／12迄）／その文に／抽象画にかわってふたたび具象画のはんらん、さらに幻想絵画へとめまぐるしい変貌を続ける現代美術……とある。／〝変貌〟は意味ないな。正に美術界の現在はまだ〝戦後〟だなと思う。／（中略）／〝深耕度〟を深くしながら、然し、その表象の中に在る〝自虐性〟。／自虐性の〝暗さ〟は〝深さ〟になるであろう。／何故なら、人間の〝生きざま〟は、否定と肯定の両方に足をふくまえ（ママ）ているから。／だから、自虐は一点して、ユーモアという明るさに転化しても出てくる一面を持っていないだろうか。／庶民的底辺の心情だな。／司馬遼太郎って、大変な人物だな。面白し。／土俗的憎悪という奴は生産だな。創造でな。／オン念、情念

四月三日／「筆にまかせる」ことについて／②－1

よく「筆にまかせる」という言い方をする。それはそれなりに、わかる気もして来るし、また、小さな自我で書いてはいけないという意味で、己れを大きく踏み出す意味で受けとめてはみても、やはり、そのことは一種の運命論ではないのだろうか。／運命論になれば、どこかで自分をあきらめるしかないことになるであろう。あきらめは拒否しなくしてはいけない。（47. 4. 3.）

五月十一日／墨人会の「命令人」と「隷属人」／②－1

日本が米国の「友好国」であるかに言われていて、いい気になっているけれども、実は「レイ属国」でしかないのが実態だ。それは沖縄基地のことを思えばよろしい。墨人も、それは確かに「同人」があって、正に同列たれども、「命令人」と、「レイ属人」とあることを知らねばなるまいて。／（47. 5. 11）／こういう言い方をしたらば「命令人」は、「レイ属人」の主体性のなさを言うであろうが命令人そのものの中身を、えぐり出しは決して、しない。えぐり出すべし。

六月十二日か／第六回日本現代書展鑑別／②－2

これは、特に今回展のことではないが、組織の問題として会員が多すぎる。会員になったら、事終わりでは無意味。段階的なプールになって、本当は面白くないのだが、→会友→会員／↑この時は、その時の審査員が推薦し、会友以上の総会時決定する。／②A、B、Cの持ち点数が自由なら、ABCに分ける意味があるか。分けた理由如何に。／③現代書展に於ける質的権威としての選別自覚を持つこと（つまり、もっと、ふるい落していいのではないか。教育指導的なのか。作家展なのか）／①鑑別時に於ける作者名は、明示してあったのかどうか／（作者別か／作品別か）／↓何故、／○→これなら、評点A、ゼロ、が理解できる—Aにはその人間が出かたには出ていなかったから。／人間を見て作品を見る、のではなく、作品に人間を見る、はず。

【解】第六回日本現代書展（六月三日—八日、埼玉、うらわ会館）は、蒼狼社、草人会、墨人会の三者連立の公募書展で、三者がそれぞれのグループを鑑別する方式で昭和四十二年（一九六七）年に始まったが、同四十六年（一九七一）の第五回展からグループの枠を外して審査する方式となった。

八月十九日／中村木子行／②－2

午後出発／滑川、中村木子宅泊り。

【解】『墨人』第二百二十五号「中村木子追悼号」で、草玄は「一升ビンを二人のまん中に立てて未明まで茶碗酒をあおりながら木子は、熱っぽく写経のことを話していた。昭和47年8月20日のことであった。」と記しており、一泊二日で木子と旧交を温めた。木子については、『拙「木子」十五』および、『拙「木子補遺」十七』参照。

〈昭和四十八年（一九七三）の手帳、ノート類は無し。〉

昭和四十九年（一九七四）

日付不明（十一月二十四日—十二月二十二日の間）／**墨人会の目標／②－3**

「墨人」の最大目標は何か、目下の目標は何か。／〈無〉。なにかによって常に満たされる無。何ものかが無に侵入し、満たし、貫き通す、そこで満たされ、刺し貫かれているところの〈無〉の中身。そして、そのことを受動的に待っているのでなら→森田の一面のよさ、他の同人の概ね一致している欠点。

日付不明（十一月二十四日—十二月二十二日の間）／**作品と孤独／②－3**

〈孤独〉、その孤独の深さだけ、その作品は深く、そして豊かであった。今の我々は、どうか。時間においまわされ、て、かすかにテレビを見ている時しか孤独になれない現代人。貧しいも致し方なく、孤独の質の違い。「秩序」て何だ。内から発せず、外から形式かしてはいかん。〈無軌道〉こそ本来。

日付不明（十一月二十四日—十二月二十二日の間）／**臨書について／②－3**

〈唯一の絶対か〉、—無限の可能の中か—。／臨書とは何で〈真似〉することの一語につきる。真似しながら、真似しようもないものに気づくこと。真似されるものとするものとが常に対比の姿の中で、対立的にするから、臨書の問題は心ある人ほど永久の問題と言えよう。／王羲之のよさ、古典の中の、特定の或る一つの古典、その臨書／臨書と創作、臨書への悩みをもちながら意外と肯定し、問題を出して来ない。

昭和五十年（一九七五）

日付不明（一月五日—二月二十三日の間）／**現今の書教育／②－3**

［〈子供の書〉］であるべきなのに／○〈先生の書〉を与える。〈先生の字〉だ、本当は／○書教育関係の資料集め／よほど犬の方が良く、目がつり上り、マユが下り、歯が出て、口ビル厚し。書家くさい、いんきくささ。年して常時□□（不明）いると、／習い性。

日付不明（十一月十六日—十二月二十日の間）／**「執着」について／②－3**

「執着しない」とか「こだわ（ら）ない（欠）」「とらわれな（い）（欠）」とよく言い、それを目ざす。が、実はその為にはもつともこだわり、執着しつくさねば駄目。でないと、いいかげんのところで妥協、引き下がることになる。／目をつぶったらいかん。執着の中でいつか知らぬうちに浮上した時、それこそ、まことの問題です。といえよう。

日付不明（八月二十一日—十二月二十日の間）／**個人と組織／②－3**

新潮選書〈絵を読む〉坂崎乙郎著／750／芸術を「運動」とみるか、全くコミュニテーなき、無価値なものとみるかによって芸術認識の分かれるところ。集団組

織の中では実はおおむね惰性、堕落するか腐敗してしまう。だからそこでは個人と組織とは、お互いぶつかり合うところとしての組織認識か、個人が集団に属従するか、どちらかしかない。

昭和五十一年（一九七六）

一月四日／牛丸好一展を見て／②－3

午后、於菊画廊、牛丸何某の個展を見て。宇野雪邨（ママ）の弟子（註二十六）。解体、文字の形○／人□（不明）の固定概念を解体／再出発／隷書作品の作り方／一字一字、一点一画珍味。／前衛風作品の〃（作り方）／↑第一筆で、あとは、パーッと。／根源的に違う由。／古い、新しいは、書体とのこと。隷書は古い、楷書は新しい。／みんな問題を自分の外においている。バカバカしい。／文章を書く（隷書作品）／文字を書く（前衛作品）／文字とことばの問題を尋ねたが、不明確だった。／宇高示穹が来。あまりペラペラ大きなことを、えらそうにまわりの人に向ってしゃべっているので、いたづらっ気を起して、質問す。拓本のことが最初の話題のキッカケ。隷書作を前衛風作との用具の違いを尋ね、（知らぬ顔して）隷書作と前衛風作との感じの違いは、どこから来るのかを尋ねる。〈◇筆の毛の働き〉についての質問、残す。

（註二十六）　牛丸好一と思われる。

五月二十三日／墨人退会の件、有一に話す。／②－3

井上有一宅、訪問。／午后2時30分到着す。／［キリンレモンの工場の横を通り］／退くことの理由を墨人誌に投稿せよとのこと。／然しその内容はむつかしい。本音を書いたのでは、犬の遠ぼえになる。／歴史的に残るような名文を書け、と言う。歴史的に残る残らないという意識皆無の現在也。／有一は今はやめないと。／今すぐ届出せず、もう少し時間をころがしておけ、と。

【解】　六月二十八日付で墨人会退会後、八月十七日、有一、今岡徳夫は草玄宅を訪れ、酒を酌み交わしていることが『墨人』第二百三十五号に記載有り。手帳②－4にも「有一行。墨人会退会の件話す。」記述有り。

六月二十八日／墨人退会届発送／②－4

墨人会退会届を辻氏宛発送。

【解】　文面「私こと六月二十八日をもって墨人会を退会しますので、このたびお届けします。／各位の今までの深い御厚誼を心から感謝します。」

十月三日／『ひびき』引継ぎの件／②－4

○堀尾君、来予定（「ひびき」受継の件）

【解】　『ひびき』誌は、墨人会の子供版として発行された『墨友』を発展させたもので、草玄の墨人会退会と共に返上するつもりであったが、墨人会からは何も返事がなく、堀尾勝彦が『響』として継続することになる。『拙「ひびき」十九』参照。

十月八日／『ひびき』題号及発行人変更申請提出／②－4

〈ひびき〉題号及発行人変更申請提出。

十月三十日／『ひびき』発行人及題号変更認可書送付／②－4

七尾（ママ）尾（ママ）氏へ、発行人及題号変更認可書その他送る。

十一月八日／『ひびき』廃刊の支部通信発送／②－4

支部通信出し。〈ひびき〉廃刊のガリ版同封。

【解】　（『ひびき』）支部長各位殿（部分）（白寿P66、資35）参照。

十二月十八日／『草玄ことば書き』原稿執筆／②－3

51．12．18（土）／共和印刷行。支払完了。／堀尾君行。事務引継ぎ。／思いば（ママ）、今から24（？）年前、私たちは当時の書壇への反発、そして、書の団体への比ハン（ママ）、師弟関係への疑問などの問題をかかえて、墨人会を結成した。その墨人会に私は考えるところあって、昨年6月28日、脱退した。「ひびき」も止めた。この作品集はその為の一つの区切りである

【解】　共和印刷は、註十七参照。本記述中の「思いば」以降の記述は、昭和五十三年（一九七八）三月三十日に発刊した『草玄ことば書き』の挿入冊子の文案と考えられる。

日付不明（十二月十八日以降）／子龍批判／②－3

これは森田子龍の文である。どういう意味でのアピールなのかその真意はよくわからないが、その文へのいろいろな疑問が残るので、私の考えるところを少しくまとめてみたい思う。／感謝〱。ついに皆にうったえようとしている。／

馬場玲たちがだしている北方墨人の巻頭に出して、もち上げている。この文(註二十七)、そんなに意味あるのだろうか。ズサン。／両／ところで森田自身とこの文とを対対の中で考えてみよう。／森田の忙了とは何か。作品集の文、／細川と同棲の為の準備の為のハカリゴトでしかない。／〇月〇日、偶然東京か(ら)(欠)の帰りの新幹線で奥様と一緒になり、東京から京都までの三時間五十分、いろ〳〵と、そのグチを聞いたことであった。(この日は京都で、今岡の学校でサークルの集りがあって、私が提案していたサークルの性格についてそれこそ□□(不明)を中心にして協議している日である)／リコンしていない、この日現在。にもかかわらず、作品集の文にあのように書き、朝日会館の個展の時は細川を、「奥様」よばわりさせている。ギマン。

(註二十七)「北方墨人の巻頭に出して」とあるが、子龍のこの文、未見。『北方墨人』は、馬場玲ら墨人会の北海道在住者が、昭和四十五年(一九七〇)四月「北方墨人会」を結成し、その会報。

日付不明(十二月十八日以降)／**今岡徳夫作品**／②-3

面白くなくなってこないと面白くない。面白くってことの中にはまだ外にコビがある。その面白さの中で終始してしまった。ということに気づいたのが、ま、言うなら、今岡この集を作るための制作の収穫といえようか。

【解】「今岡この集」は、不明。草玄は今岡と昭和四十三年(一九六八)十二月、二人展を開催したり、ひびきの会で協力を得たり、交流が深く、その分、辛辣な批評もした。

十二月三十一日／鄭文公下碑の臨書／②-4

〇鄭文公下碑の臨書

昭和五十二年(一九七七)

一月三十一日／芸道と権威／②-5

金閣、銀閣を見る。〝芸道〟の問題にからむ世阿弥と足利のかかわり。やはり能は権威、上、を見ていった。

四月八日／『響』4月号の感想／②-5

〝響〟4月号到着。課題の出し方、その内容、まことに不満。やっぱり書を底からつかんでいない。特色キ薄。

五月九日／作品制作／②-5

小山行(註二十八)。作品できず。気、重く、体、重く。

(註二十八)「小山行」とは、草玄の作品制作の仕事場のあった地名、山科区小山。

六月七日／滋賀県展審査依頼／②-5

夜、北川邦之氏(註二十九)よりTEL。9月(9／27(火))の滋賀県展の審査依頼。↑(欄外に)断りの理由／①書は「ことば」を書くことと理解している。単なる美でも、芸術でもない。にもかかわらず、私は漢詩は読めない。審査員としては失格。↓(6／9の理由へも↓)

(註二十九)当時は、滋賀県書道協会理事か。

六月九日／滋賀県展審査断り／②-5

夜、北川氏へTEL、県展審査断る。↓(欄外に)6／9「眼力」と「教養」の二つのものの保持が條件になるのに、小生には「教養」なし。

七月一日／作品集作品撮影／②-5

作品集用の作品選び。写真撮影。旧作は〈今日一日〉〈ひふみよ〉を加えて、計、十点。

【解】翌五十三年(一九七八)三月三十日発行する『草玄ことばが書き』のための撮影。《今日一日》(白寿p175、S46-10-2)、《ひふみよ》は、(白寿p180、S51-F-1)か、他の作品かは不明。同作品集には掲載されていない。

八月二日／雁塔聖教序臨書／②-5

小山行。臨書。雁塔。

【解】草玄は、七月二十四日から、山科区小山の仕事場に書き反古の焼却と草取りに行き、二十七日から臨書に向かっている(二十八、九日は外出)。一日には「小山行。臨書。建中帖。」の記述も同手帳②-5に有り。翌三日には、須田剋太を尋ね、五日には、柏崎に向かっていることが、同手帳②-5の前後の記述から確認できる。

八月十七日／臨書する／②-5

小山行。臨書。硯をけずり直す。

【解】 前日も「小山行。臨書。」の記述、同手帳②-5に有り。

八月二十一日／争座位帖臨書／②-5

小山行。顔真卿の争座位臨。

九月三日／墨作り／②-5

小山行、ススとボンドで墨を作って書いてみたが、紙に乗らず駄目。やはり足が短かい。終日墨スリ。

九月四日／筆作り／②-5

小山行。春に買ってきたダチョウの毛で筆作り。

【解】 墨づくりや筆づくりは、「自分で研究するもの」として、多くを語らなかった。その筆づくりの用いた毛の種類が判る記述。

九月五日／建中告身帖臨書／②-5

小山行。建中告身帖臨書。

十月二十二日／良寛座談会／②-5

◇午后3時より、大阪で良寛座談会。／村上三島氏欠席で、まこと残念。彼の良寛観を聞きたかったのに。

【解】 「良寛論集」座談会〝伝統と良寛〟。大阪東区今橋・喜太八で開催。草玄の他、有田光甫司会、小沢神魚（正筆会）、村上翠亭（新書人連合、筑波大学助教授）、菅野清峰（飛雲会）参集。三島は、「若い頃、中国風が堪能でも、年寄りになると和風の書になるって昔から云われていることですが、私もその通りで、六十前後から、特に良寛が好ましい書になって来ました。」と、村上三島展（平成十四年（二〇〇二）五月二十五日―七月七日　愛媛県美術館）図録に記しているように、六十歳前後になる昭和四十六年（一九七一）頃から、それまでの王鐸の影響を受けた交錯し連綿する線による作品ではなく、良寛的な点と、短い線による平易な良寛調の作品を多く書き出している。良寛研究をしていた草玄だが、書については決して良寛調の書となるのではなく、独自の書を追及していたことで、三島の考えを聞きたかったと考えられる。

昭和五十三年（一九七八）

一月三十日／良寛原稿執筆／②-6

「良寛」書き。一休との比較で下落させたので、これから浮上せねばならない。大難事。

【解】 同月二十八日「良寛原稿書き。」の記述、同手帳②-6に有り。

八月七日／子龍墨人会脱退のこと／②-6

森田が墨人会を脱退した由。何故ならん。

十一月六日／作品制作／②-6

小山行。「はふはふと、地にはう虫、天かけたいか」の作、ようやく終止符打つ。

【解】 昭和六十年（一九八五）頃の《はふはふとちにはうむしあまかけたいか》（白寿p185、S60-C-1）有り。この作品か、その前段階かは不明。

日付不明／《忘筌》（当館蔵）の言われか／③-6

不能忘筌（捨蹄忘筌／忘筌捨蹄）／かばかりわれにおもはせて真実あはれとおもひなば／ひとよは夢にきてもみよなべて無情（すげな）き世のおきて夢だに不義といふやらん。／（佐藤春夫・情癡録秘抄）

日付不明／《花眼》（当館蔵）の言われか／③-6

「花眼」俳人森澄雄の第二句集の名。中国語での酔眼、或は老眼を意味する由。花の美しさが本当に見える年令という願いをこめて、森澄雄は自作の句集に「花眼」と命名した由。空海は三教指帰で、美人の眼、乏しい女の眼、美しい眼として使っている。

【解】 前項の日付不明《忘筌》、本記述の《花眼》いずれも、後の《忘筌》（白寿p181、S55-F-2）、《花眼》（白寿p182、S55-F-14および、同p183、S56-F-16）に繋がる語句の発見と思われる。

昭和五十四年（一九七九）

二月五日／〝ことば〟の問題／②-7

午前、新井狼子への返事の〝ことば〟の問題を考える。

【解】 前日四日「〝ことば〟の問題」の記述、同手帳②-7に有り。この「〝書〟と〝ことば〟」の問題は、昭和五十四年（一九七九）五月三日発行となる『書――ことばの姿――』にまとめられていく。同著の「あとがき」に「具体的には、新井狼子氏から草玄ことば書き対談にかかわる質問を受けた、それへの返事として起草したものである。一月末に問われて今ようやく脱稿した。（中略）／昭和五十四年三月」と記述されている。同年三月二十七日の【解】参照。

二月二十二日／〝書〟の原稿清書／②-7

〝書〟のこと、一応、原稿紙へ清書完了。30枚ほど。

【解】 二月五日の記述に同じ。

二月二十五日／書の研究会／②-7

午后1時から伝統産業会館で書の会の集まり。5時終了後、ウドンを食って解散。内容は臨書批評と和風のこと。夜〈書〉の原稿ようやく一応脱稿す。

【解】 書の会の集まりについては、前日二十四日「明日の為の臨書。三十帖冊子の逸勢の部分。」の記述、同手帳②-7に有り、三十帖冊子、橘逸勢部分が臨書批評の対象であったことが確認できる。

三月二十日／光明皇后「楽毅論」の臨書／②-7

午前、明日の為の臨書。光明皇后の楽毅論。

【解】 二月二十五日の書の会の集まり同様、翌日集まりが持たれたと思われる。

三月二十七日／『書――ことばの姿――』原稿執筆／②-7

午前中、〈おわりに〉を書き、完。

【解】 同月二十四日「〈書〉の原稿手入れ。」の記述、同手帳②-7に有り。『書――ことばの姿――』の原稿、二月二十二日に清書完了したものに、修正を加えて、書き上がったと考えられる。なお、同著に「おわりに」の章は無く、「あとがき」を指すものと思われ、校正段階で修正されたとも考えられる。また、「あとがき」の日付が「昭和五十四年三月」となっていることから、この二十七日での「完」が、ほぼ原稿執筆の完であったと考えられる。同年二月五日の【解】参照。

四月二十四日／木子七回忌連絡／②-7

中村木子七回忌を滑川で30日にやる由なので（篠田昭二からＴＥＬあり。滑川の電話番号を尋ねる為）。¥5,000と手紙を送る。

【解】 前掲、昭和四十七年（一九七二）八月十九日の記述の翌年五月二十九日に木子は死去している。『拙「木子」十五』参照。

四月二十八日／《白雲漠々》の制作／②-7

小山行。久しぶり。何ヶ月ぶりか。昨年10月以降かもしれない。サンショの木、無し。根こそぎ無し。誰かが抜いていったのだ。寒し。「白雲漠々」を書く。勿論できず。

【解】 前年十一月六日の記述参照。この頃から小山の仕事場に行っていなかったと窺われる。《白雲漠々》は未見。写真アルバムに無し。

四月二十九日／《白雲漠々》の制作／②-7

小山行。「白雲漠々」。ゆったりさが出ない。素朴さが出ない。筆が走りすぎる。

五月八日／『書――ことばの姿――』完成／②-7

夜〈書――ことばの姿――〉の冊子到着。／（欄外に）〈書――ことばの姿――〉の冊子、完成。5／8。

【解】 同著の奥付には「1979年5月3日」となっている。

五月二十日／池田、宮川個展の感想／②-7

豊中に、池田・宮川個展行。出来上りのまとまりを気にせず、もっと独断と偏見の開きなおりを出せないものか。他、世の中、の目を気にしすぎる。社会を共にあるなんてのは、年寄りにまかせること。ぶざまさそのままで開き直れないか。

五月二十五日／墨人会批判／②-7

今岡から、有一が病気の為、会友になりたい由、申出ありし由。当然、公募展出品の場合は応募鑑審査を受けるとか。それで、創立会員の江口、有一、森田の三人を名誉会員にしたき由。変な話。塩野、原田も同人であったのに外すとは差別、段階の発想也。そのような特別段階への批判として発足したのが墨人会であったはず也。

【解】 墨人会発足時、師弟関係を否定し、師であった上田桑鳩に対しても、旧来の師弟関係を払拭し、封建性を内包するすべてのものから自由であることを期するため、離脱することを昭和二十七年（一九五

二)二月一日付手紙で送っている〈白寿p23、資15〉。また、同年三月十日付「墨人会結成挨拶」でも、「私共五人の関係もすべて平等でありまして(中略)私共のグループに同志として参加したい方のある場合も、それが真に真実なものでありましたらば、喜んで平等の立場に於て結ばれたいということも考えております。」(白寿p23、資17)と、書を追求する各人は、対等関係で追求して行く姿勢を示していた。

六月二日／《白雲漠々》の制作／②－7

小山行。「白雲漠々」がなかなか出きぬ。

【解】 同年四月二十八日の【解】参照。

六月九日／《白雲そらにあるなんぞふかしぎ》の制作／②－7

小山行。〈白雲そらにあるなんぞふかしぎ〉の作。

【解】《白雲そらにあるんぞふかしぎ》(白寿p181、S54-F-1)の一連の作と思われる。

六月二十一日／墨人会批判／②－7

夜、新ミヤコビヤガーデンで今岡と会う。墨人会では、創立会員を客友として、抱え込もうとしている。

【解】 同年五月二十五日の【解】に同じ。

七月九日／《忘筌》《自得》の制作／②－7

小山行。「忘筌」を書いていたが、ものにならず、途中から「自得」を書く。

【解】《忘筌》(白寿p181、S55-F-2)は、昭和五十九年(一九八四)八月の「草玄の書・南海雄の書」で発表される作品の前段階と考えられる。《自得》(白寿p182、S55-F-5および、S55-F-6)も前段階と考えられる。同年九月十七日参照。

七月十四日／《白雲》の制作／②－7

小山行。また〈白雲〉を書く。

八月九日／仮名の制作／②－7

小山行。途中、龍枝堂の太筆¥10万を見に行く。仮名の二曲書けず。書くにふさわしい、かなり筆がどれかまだつかめない故か。

【解】 どの作品を指すか不明。翌日も「小山行。書けず。あれこれ筆之選択に終始する。」の記述、同手帳②－7に有り。

八月十一日／作品制作／②－7

小山行。仮名作、書けず。良寛の「月の兎」の歌はもう一つ心に突きささらない。「はふはふと地をはふ虫」を書く。この語の方が乗れそう。

【解】《はふはふと地をはふ虫》未見。写真アルバムに無し。他者の句の一部か、草玄の句かも不明。ただし、昭和六十年(一九八五)頃の作で、《はふはふとちにはふかあまかけたいか》(白寿p185、S60-C-1)および、《はふはふと虫》(同、S60-C-2)が有り、比較的変化の少ない、淡々と書かれている作品があることから、それ以前の同五十四年(一九七九)頃の作品にも淡々と書かれている作品もあるので、《はふはふと地をはふ虫》も同様な調子だったかもしれない。また、前年十一月六日の記述参照。

八月十二日／作品制作／②－7

小山行。最後の二枚で、「はふはふとむし」完。

【解】 昭和六十年(一九八五)頃の《はふはふと虫》(白寿p185、S60-C-2)が、これにあたるか、または、前段階の作品かは不明。

八月十八日／阿部家と良寛、そして有願／②－7

阿部家は「夕くれの丘」の西。分水の為、渡部は主として、西岸に明治末移転の由。六曲屏風の墨は、茶墨か。明るい茶色也。「墨美」に掲載とは全く別趣。／原田勘平宅の「有願」ウガンの字に、良寛のドクロの歌の書と共通の形意のものあり。有願をもっと調べるべし。／阿部家／1969.4「阿部家の良寛1」／六曲屏風　茶墨か、さわやかな色、さわりない筆ゆき。良寛らしくない、やわらかな、大らかさ。／新飯田(白根)に有願の碑／[日国有願]—原田美術館

【解】 草玄は、八月十五日から柏崎、分水、寺泊、湯之谷を二十一日まで周り、その後、浦和での『響』大会に参加し、二十七日帰宅が同手帳②－7の記述に確認できる。阿部家は阿部定珍をはじめ、良寛を遇した御三家の一つ。明治から始まる大河津分水工事で土地が区画に入り、現在地に移転している。また、六曲屏風は「風気稍和調」で始まる良寛初期の一隻。重要文化財。

日付不明(八月中旬か)／『響』大会(八月二十四日)での講演下書きか／②－7

「子供の書における言葉」が明日の議題であるので、その前座として何か言えという命令。無関係ではないが、「響」の場合は、編集者(今は)からの一方的与え、規制である。私は、私が主体的に選ぶ。その意味で、今回の「子供の書における ことば」についての問題提起の意味全く不明。大人の私の場合とは、全く——

無関係であり、意味不明――／それはそれとして、子供は書く言葉に無関心かというと、決してそうでない。かわ―川・皮。／あめ―雨か、飴か／は―葉、歯／はな―鼻、花／必ず意味を聞く。やはり、書く言葉の中身をつかもうとする。あまりピッタリしない語句の場合、ざっくりとした顔になる。／その意味で、54．4「まけ」54．3「えだ」の語は？／然し、子供とは不可思議。語句のいかんにかかわらず、いい作を生む。何故か。全く魔者（ママ）としか言いようがない。／○日置路花の文○／皆さんは、それの書、子供の書、共に、権威、私の出る幕でない。まとまらない話でお茶をにごしますのでしばらく御辛抱を（以下無し）

八月二十四日／『響』のことで／②－7

浦和での「響」大会。堀尾君は、こちらの意見をすいあげようとしないので駄目也。

八月二十八日／『響』のことで／②－7

終日、手紙書き。特に今井満里氏宛に堀尾君の「響」への期待をあきらめる意志を発言。

日付不明（八月か）／異質とのぶつかり合い／②－7

異質のものとぶつかり合うこと。仲間内だけでは、なれ合いになって、目が曇る。異質は対応意識のもとで、目がかがやく。俺の臨書を見よ。何だお前のその臨書は、という敵対意識を常にもやすこと。仲間とは、一番の敵のこと。

九月十七日／《自得》制作／②－7

小山行。竹を切り、筆を作る。「自得」制作。／（中略）／◇墨人誌等三冊送られてくる（辻から）珍らしきこと也。

【解】《自得》（白寿p182、S55-F-5および、S55-F-6）のいずれかの可能性が高いが不明。同年七月九日参照。

九月十八日／辻太への返信／②－7

その通信『墨人作品集及び雑誌253号、254号落手、各位の近況拝見しました。唐突のこの異変に驚きつつも、数年ぶりゆえやや興味の中でありました。右落掌御禮迨』と出す。

九月二十四日／《天下、かたつむりのつっぱり》制作／②－7

小山行。「天下、かたつむりのつっぱり」。

【解】《天下、かたつむりのつっぱり》（白寿p181、S54-F-6）か不明。

十一月十二日／《天下あるいてみち》制作／②－7

小山行。「天下あるいてみち」の作、ようやくこれかなの作、出来。

【解】《天下、あるいてみち（白寿p181、S54-F-2～4）のいずれかか。

十一月十七日／中野越南展の感想／②－7

「自然」という題で、中野越南書展の感想を、400字、7枚で、ようやく完。

【解】十一月十一日に知恩寺で開催の「中野越南書展」を見た記述が、同手帳②－7に有り。同月二十日にコピーを安達獄南（中野越南弟子）、堀尾勝彦、日置路花に送った記述も同手帳②－7に有り。また、同月二十七日、獄南から「自然」の原稿を越南の団体機関誌『水明』への掲載許可の電話があったことも同手帳②－7に有り。翌年『水明』一月号に掲載。

日付不明／浅利篤の指導法への疑問／②－7

ブレーン出版／浅利篤著「児童画の意味」／黎明書房　浅利篤著「児童画の秘密」／◇〝児童画〟と言うからには大人のそれと区別していることで、その違いは何か。／書の場合／児童書はある。児童が書いた書だから。然し、老婆の書と児童書との間にどれだけの差があるのだろうか。同じとするならば、何ゆえあえて児童書と言うのだろう。それは、たぶんに〈教育〉的意識からの発想において出てくる語ではないのだろうか。／「主題もモチーフも、色も形もすべて干渉せず、子供たちの自由に任せること、そうすれば絵の後ろ側に生活が表現される」――浅利診断法による自由想画法――、浅利的な見方は、医者的見方で、作品の見方としては病的といってよかろうが、上の自由想画法は、大人の一般作品も、つまりはこのように作者の生活、つまり世界観の表出であり、そこの見ることが作品を見ることだと言ってもよいと思うが。／けれども、子供に於て、全く〈自由に〉してといっていては、放り出しぱなし、無責任、になって逆に子供の不自由の中に入り込むのでは。

昭和五十五年（一九八〇）

日付不明（一月か）／**人間の情緒についての問い**／②－8

この頃、「昼」と「夜」の二つしかない。「朝」と「夕暮れ」を見過ごしている。「朝」と「夕暮れ」にこそ、人間の情緒に直接するものがある。それを落しているので人間のふくらみ、美しさへの感覚、関心、注目の心が欠如していくのだ。

二月一日／**鉄斎展の感想**／②－8

葵幼稚園の帰り（註三十）、高島屋の鉄斎展を見る。西オン寺公望や、その他庶民には見むきもせずの高姿勢は好かない。良い意味では、キ然、悪い意味では権威思考。然し蘇東坡に興味しているのは面白し。

（註三十）葵幼稚園についてどういう関係か、一美、久幸姉弟に確認するも不明。

四月十四日／**柳宗悦『茶と美』の感想**／②－8

「茶と美」を読む。柳の書への考え方、全くおかし。

日付不明（二月一日―五月五日の間）／**「現前」は禅語か**／②－8

有一の作に「現前」があったが、これは、禅における大疑現前から来ているのか。〈ニヒリズム、その超克〉／平常、いつでも、歴々と明らかに現前している。―生きていることの本来の姿。（西谷啓治〝風のこころ〟P．215）

五月十日／**初ドーサ引き**／②－8

放光堂へ行き、ドーサ引きハケ他、材料、1万4千購入。夜、初めてドーサを引く。

【解】翌日も「晴天。小山行を予定していたが、やはり、ドーサびきに終始する。」記述、同手帳②－8に有り。

五月十二日／**作品制作**／②－8

小山行。制作開始第一日目。夏の如き暑くて、体だるし。

五月十七日／**子龍批判**／②－8

〝躍〟第4号の森田文章への批評文書き上げる。

【解】未見。

五月十八日／**作品制作**／②－8

小山行。どうも乗らない。体、重し。書きはじめて二日目のせいか。

五月十九日／**制作**／②－8

家にて研究会の為の良寛臨書。／夕方から、夜にかけて、ドーサ引き。

五月二十三日／**横山大観評**／②－8

葵幼稚園の帰り、加納さんから券を貰って美術館での横山大観展を見る。40才、50才位がよく、晩年の富士は有名なれど、全く駄目と思う。／夏の如く暑し。

【解】横山大観展、五月二十日―六月十九日、京都市美術館開催。

五月二十八日／**個展開催について郡定也と相談**／②－8

A．M．11：00文化芸術会館。郡様と。個展は自らではやりたくないと決めていたのだが、何やら心の底でうごめき出すものあり、ためにその相談也。会場に森田と細川と来ていた。

【解】個展は、昭和五十九年（一九八四）開催の二人展「草玄の書・南海雄の書」まで無し。

六月二日／**《怒》、《一期は夢よ》**／②－8

「怒」「一期は夢よ」の小品、持ち帰る。

【解】《怒》は未見。作品アルバムに無し。《一期は夢よ》は、閑吟集からの語句。昭和五十九年（一九八四）開催の二人展「草玄の書・南海雄の書」に出品作（当館蔵）か、それ以前の作か不明。

六月十三日／**比田井南谷評**／②－8

南谷作品についての意見、狼子宛、清書。

【解】翌六月十四日付の原稿用紙六枚の複写が残る。「狼子兄は〝書的感動〟と〝書の感動〟とは相手の主張によって使い分けているということですが、以上の意味でわたしは書と書的とは、作それ自体にかかわって識別されるべきものだと思っております。」と狼子との考えの違いを述べている。

六月二十三日／**佐藤大朴・新井狼子書展**／②－8

夕方5時、秀友画廊行。大朴個展のパーテー出席。

六月二十四日／佐藤大朴・新井狼子書展評／②－8

秀友画廊、墨の画廊行。／（欄外に）感／大朴作、骨力不足。ただ何とはなしの作。大朴に望むのは無理だが、大朴の名が泣く。／狼子作、地ぬりの作に刺激あり。仕事をしている。他の、いわゆる書の作は、サンマン也。力が集中して出てこない。

【解】前日にも記述のある二人展。銀座秀友画廊で、六月二十四日―二十九日開催。

七月二十六日／《花眼》制作／②－8

二曲の「花眼」。

【解】《花眼》（白寿p182、S55-F-14）も全紙二枚で書かれており、可能性が高いか、違う作か不明。

八月三日／《自如》制作／②－8

小山行。「自如」出来たか。

【解】《自如》（白寿p182、S55-F-11）も全紙二枚で書かれており、可能性が高いか、違う作か不明。

八月二十三日／佐藤大朴へ返信／②－8

大朴から手紙あり、名寄大会に狼子が行ってよかったと。通信書く。墨象は一大反省期と。

【解】翌二十四日付の下書き残る。以下、文面：「八月二十四日に返信する。／　狼子からも「……墨象というジャンルまで規定しているとしたらナンセンス……」と来信あり、と報告し、／　墨象の語に対して墨象会発足当初に大朴に異論を述べておいたことあるが、今、ふれず、とにかく、馬場、照井、渋谷は同人になってからタガがゆるんで悪くなった。と同感し、そのことにふれての狼子宛の七月十三日付の手紙を写す。そして、とにかく「墨象」は一大反省の時期に来ている。狼子言う如くジャンル化して書のそれを小さく規定してはいけません。と書き送る。」

八月二十四日／《みづにすむかはづ》制作／②－8

昼食後小山行。「みづにすむかはづ」を書いて、昨日の三点と合せて、四季完。

【解】二十一日から二十八日小山行きの記述確認できる。「みずにすむかはづ」は、『古今集』仮名序冒頭に有り。《里の雪、花に鳴く鶯、水にすむかはづ、野に咲く萩》（白寿p182、S56-F-1）【図8】は、全紙四枚に書かれており、「昨日の三点と合せて、四季完」とあることから、三幅目の部分とも考えられる。

九月六日／書譜と光定戒牒の臨書／②－8

終日、臨書。集まりの為の書譜と「響」用の嵯峨天皇の光定戒牒。

【解】同月、八日、十二日にも嵯峨天皇の光定戒牒を臨書した記述、同手帳②－8に有り。

九月二十九日／《里の雪、花に鳴く鶯、水にすむかはづ、野に咲く萩》の制作／②－8

小山行。四季の語、やっぱり書けず。

【解】八月二十四日の【解】同様、【図8】の制作と思われる。

十月七日／『響』誌返上相談／②－8

堀尾君から響誌返上を本気で考えてほしいと来信。返上の語は不適、不要と返信。

【解】『響』は、草玄主宰の『ひびき』から、堀尾勝彦が昭和五十一年（一九七六）十二月号から改題して引き継いだ書教育の雑誌。『拙「ひびき」十九』参照。

十月十三日／『響』誌返上相談／②－8

堀尾君から〈響〉の件、手紙あり、重荷であるという。返信。

十一月十六日／安藤小芳との墨象についての手紙の謄写印刷／②－8

午后から、安藤小芳氏との、墨象にかかわる手紙のやりとりの分、トウシャ印刷。

【解】十一月三日付までの往復書翰をガリ版印刷に書き起こし、『山階雑稿』として知人に配布した、後の『山階通信』の前身の冊子。

十一月二十三日／《花眼》制作／②－8

〈花眼〉を書く。昨夜よく寝たせいか、体調よし。

【解】翌日も制作の記述が同手帳②－8に有るが、《花眼》（白寿p182、S55-F-14）か、同（同p183、S56-F-16、当

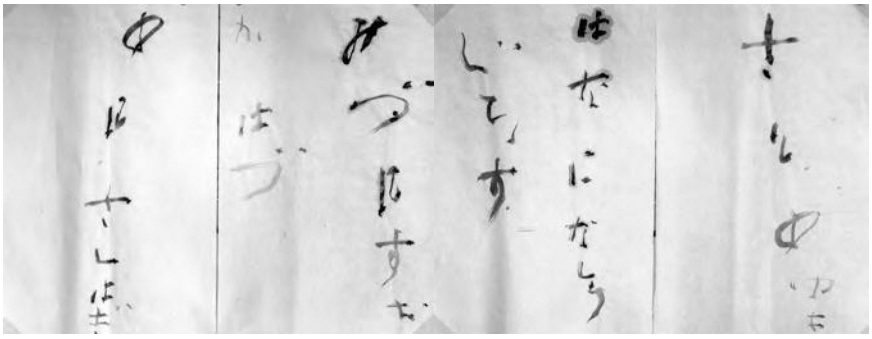

図8　《里の雪、花に鳴く鶯、水にすむかはづ、野に咲く萩》

館蔵）か、別の作品か不明。

十二月十日／「1980年の書」原稿執筆／②－8

夜、墨美社から問われていた〈1980年の書〉特集号の為の短文、完了。

【解】 墨美社から「作品の社会的関連を問われて」発送した文は次に掲載のとおり。しかし、翌年、四百字での要請をされ、五月十八日付の書き直した原稿も残る。

「お書きになっている詩、歌、句などを書作品の社会性との関連の上で、どのようにお考えになっていますか。」の問いに答えてのもの／いやに正面きって社会性を持ち出すその姿勢に反撥をもつ。大義名分を世の為、人の為とする姿勢にマユツバものしか感じない。／ その語句と作品の社会性との関連を問われて答えるのことば／ 社会性といえば効用でなく関係であろう。関係は「我」と「汝」である。作品は「我」と「汝」を「我」と「汝」たらしめる。書きしるされることばは「我」と「汝」をいっそう「我」と「汝」たらしめる。かく考えるといえどもあらかじめ「我」は「汝」を前提しない。ことばは「我」に問うための「我」のことばである。我がことばを〈此一筋〉につなげて記録する作業が我が書の作の生まれる因である。／55. 12. 10／墨美「一九八〇年の書」のためのもの

昭和五十六年（一九八一）

二月十六日／堀尾氏からの『響』誌存続の相談／②－9

堀尾君から葉書あり。胃と十二指腸に潰瘍。糖尿病の為、手術不可能。〈響〉の件、誰れでもよいから引渡す人を見つけよと。とりあえず、編集等手助けするがと返信。

六月二十九日／《徳不孤》の制作／②－9

午後から小山行。時田行の床間用掛物として半切作品に「徳不孤」。春から書けど、今だ完了せず。横に書く方が書きやすいようだ。半切横一点、そして横小品一点、ややよしか。しかし行に書かなくてはいけない。

【解】《徳不孤》〈白寿p182、S56-F-2および、S56-F-3〉の作品か不明。前年にも横もの（白寿p182、S55-F-9）を書いている。

八月五日／《ヨゴトマガゴトワキマヘシレド》の制作／②－9

午后から小山行。はじめての片仮名作をする。大和コトバはやはり片仮名がふさわしい感じ。〈ヨゴトマガゴトワキマヘシレド〉。

【解】「草玄の書・南海雄の書」で発表の《ヨゴトマガゴトワキマヘシレド》（白寿p185、S59-17）か、この一連の作品。

八月二十八日／新井狼子宛返信ガリ版／②－9

狼子宛「子供の書」返事原紙切り、印刷。

【解】 八月二十八日付のガリ版印刷三枚の長文の記述が別に残る。

九月二十三日／草筆、竹筆の使用／②－9

午后、小山行。草筆、竹筆を使うのが、ややマンネリ。体調も、ものうし。

十月三日／須田剋太展、井上有一展／②－9

須田剋太展行。会場で狼子に会う。有一も個展をやっていて、篠田君から案内で会場に行き、彼本人に会う。墨美300号の件を言っていた。

【解】 須田剋太展（名古屋丸栄スカイル）、有一展（名古屋、ギャラリー・ウォール）。

十月二十三日／リヒターと面晤／②－9

リヒター氏。后4時、新門前の岩波旅館で会う。明年又は明後年のドイツ展の件。今回は現代作家と古典とのかかわりをテーマにする由。一つの試みとして面白いと思う。

【解】 1985年5―7月、ベルリン・東洋美術館、シュツットガルト・リンデン美術館で開催予定の「近代日本の書道芸術展『書』」の準備が進められていたが、リンデン博物館の予算削減により1985年1月9日中止になる。1985年1月22日付東洋美術館エアメール残る。

昭和五十七年（一九八二）

一月十八日／原稿執筆／②－10

終日炬燵で、自信と見識にかかわる文の草稿作り。

【解】『山階通信』二月発行号に「自信・見識」として記述掲載。

一月二十四日／鉄斎書翰解読／②－10

昨年冬、鉄斎書翰解読、併せて文五枚書いたそれに手を入れ、ガリ版印刷。集りの人たちへ送るため。

二月五日／新井狼子との往復書翰「書―叩叩―」の検討／②-10

終日「書―叩叩―」の検討。

【解】昭和五十六年（一九八一）五月一日付の草玄から狼子への手紙に始まり、十一月十三日付草玄から狼子宛の往復書翰。『響』に「書―叩叩―」として同年八月号から同五十九年（一九八四）九月号まで、二十一回連載される。二人の書簡の往来は、それ以前、以後共に頻繁にある。

二月十三日／新井狼子との往復書翰「書―叩叩―」／②-10

朝10時半、神保町の名著刊行会にて諸橋氏と会い、「書―叩叩―」の製本の件、話す。

二月十四日／『山階通信』二月発行号印刷／②-10

「自信の見識」の山階通信、ガリ版切り。

【解】同年一月十八日の【解】に同じ。

四月十六日／新井狼子との往復書翰「書―叩叩―」校正／②-10

終日、書―叩叩―の原稿。直し。清書始める。

五月十四日／展覧会感想／②-10

大阪西天満、白ギャラリーでの鈴木治の陶展を見に行く。もう一つ、感銘少なし。題名の雲によるもののあまりにも具象的であった。うすい感。百万辺の思文閣の、西川一草亭展を見る。鉄斎華札があるので、有益。

六月二十一日／作品制作／②-10

午后、小山行。除草。雷雨の為、久しぶりに筆を持つ。しかし相も変らない筆運び也。

六月二十五日／「書譜」と「千字文」の臨書／②-10

過庭の書譜と千字文の臨書。27日の為のもの。

八月十九日／『山階通信』八月（二回目）発行号原紙きり／②-10

山階通信―某日の記―（書家の中国行）、原紙きり。

八月二十四日／『山階通信』十月発行号原稿執筆／②-10

良寛贋物の〈某日の記〉5枚、書く。

【解】『山階通信』十月発行号の「贋物」の原稿、九月十七日の原稿「某日の記若烹小鮮」『山階通信』九月発行と発行順が変わっている。

九月十七日／『山階通信』九月発行号草稿執筆／②-10

「若烹小鮮」草稿完。

十月四日／京都日本画専門学校での指導／②-10

京都日本画専門学校行。今日から、二回生の後期一般教養の書道担当。基本的な考えと、道具の準備のことで、今日の第一回は終了。山本六郎氏も来る。

【解】山本六郎は、昭和五十六～五十八年（一九八一～八三）、京都日本画専門学校主任教授。教職課程「書道」も担当し、草玄に依頼したと考えられる。

十一月二十日／木簡の臨書／②-10

22日（月）の分、下調べの後、木簡臨書。

【解】前日も「木簡臨書」記述、同手帳②-10に有り。「22日分の下調べ」は、京都日本画専門学校の授業のこと。

十一月二十七日／「書譜」の調査／②-10

終日、「書譜」調べ、「書における点―線的点」の為。

【解】翌五十八年（一九八三）一月発行『山階通信』「点画」の為の調査。

日付不明／わび、さび／②-10

〈韓国の文化には日本文化の基流といわれる「わび」「さび」がなく、奈良朝文化がそのまま息づいている感じだ。エネルギーも大陸的で直線的だ〉と57.1.7の朝日新聞に出ている。ならば、わび、さびは平安以降で、何ゆえに日本に誕生したのだろうか。書とのかかわりで見た時は、どうなるのだろうか。

昭和五十八年（一九八三）

一月十四日／『山階通信』一月発行号原稿執筆／②－11

終日「点画」まとめ。夜、大体、完。

【解】一月八日「点画」の草稿づくり開始。」、九日「終日、「点画」の草稿」の記述、同手帳②－11に有り。

一月二十二日／「川柳、雑俳」の本入手／②－11

古本屋（梅田かっぱ街）を歩き、「川柳、雑俳」の本入手。

二月四日／馬場怜への返信検討／②－11

終日、馬場怜への返事、草稿。

【解】『山階通信』二月発行号に「馬場玲への返答」として掲載。北海道在住で墨人会所属の馬場と脱会した草玄との、墨人会の「権威化」、「様式化」等の草玄が脱会した要因でもあったことについて、書簡の往来が記述される。同月二十一日「馬場怜への返信、完。ガリ版を切る。」と同手帳②－11に記述有り。

二月二十八日／日本画専門学校最終講義／②－11

日本画専門学校最終講。

四月六日／『山階通信』四月発行号原稿執筆／②－11

「近況雑記」の原稿、完。山階通信用。

【解】『山階通信』四月発行号、近況とともに「九方皐」のことが記され、「木を見て森を見ずなんてことでなく、相馬の目にあやからねばならない。」と記している。

四月十一日／『山階通信』五月発行号原稿執筆／②－11

終日、武満徹の文を中心にしての文、草稿。

【解】『山階通信』五月発行号、作曲家武満徹が指揮者岩城宏之について語っていることについて、思うことが記されている。五月二十七日と同じ原稿。

五月二十七日／『山階通信』五月発行号印刷／②－11

「岩城宏之の音楽」のガリ版、印刷。

五月二十八日／空海「灌頂記」の臨書／②－11

終日、灌頂記臨書。

六月十七日／『山階通信』六月発行号原稿執筆／②－11

〈池大雅〉の山階通信草稿作り。

【解】『山階通信』六月発行号、京都国立博物館で《天馬賦》の巻子が全巻広げられて展示してあるのを見て、その筆の風韻に感嘆し、それ以上に「私の中には大きく激するものが入った思いであった。」と記している。

六月二十日過ぎ／自分の生き方／③－2

（全文潰して有るも記載）追記／去る六月十九日、亡弟の納骨の為の千葉行きの帰り、翌二十日、墨人東京展会場に狼子氏達と一緒に行く。そこで大沢華空氏が先ず開口一番、江口さんどうして生活しているのですか、と。これには参った。これまで墨人会から食わせてもらっていたわけではないし、勿論、大沢華空から、一銭の生活費を支給されたこともない。彼、もはや七十を過ぎていつまで「ことば足らず」や「ことば知らず」では済まされまい。その言を単にどういう意味で彼は、そんなふうに言ったのだろうか。今もって不可解の言葉としか言えない。／只管打産（ママ）の如く静寂沈。潜もまた生き方の現れであり表わしである、これもまた、いのちの躍動の範チュウに入れなければならない。

【解】このことは、『山階通信』同年六月発行号に池大雅の次に、「O氏」と伏せて記されている。

七月十一日／無限展出品応諾／②－11

日置さんからTEL。無限展への出陳のさそい。諾の返事をしておく。

【解】無限展は、新井狼子が代表で昭和五十五年（一九八〇）年結成した無限会の書展。日置路花、石川宇妻火らが参加している。

七月二十一日／『墨』原稿依頼／②－11

〝墨〟の太田博史氏から、9月号用随想文700字と、11月に出る別冊3号の空海号の為のコメント、800字依頼あり。

【解】同月二十八日「〝墨〟太田博史氏宛、「墨想墨話」の原稿発送。」の記述、同手帳②－11に有り。

八月八日／二人展会場決定／②－11

上京。南海雄君と会い、画廊検討。結局、洋協ホールに決定。来年8月。

【解】翌年八月十二日―十七日開催の「草玄の書・南海雄の書」。翌日、鶯谷の書道博物館、新井狼子たちの無限会展を見て、十日帰宅の記述が同手帳②－11に有り。

八月十二日／『墨』原稿完／②－11

〝墨〟空海号への灌頂記コメント800字、完。／午后、小山行。

日付不明（夏頃か）／ただならざる文字／③－2

〈ただの文字〉から、それを〈ただならざる文字〉にする者―書家。最初から、〈ただならざる文字〉であるのではない。文字と書との密接

九月三日／『山階通信』十二月発行号原稿完／②－11

「有願の里、新飯田」完。

【解】『山階通信』十二月発行号の原稿。有願は、良寛の道友で二十歳年長。

九月二十六日／リヒターとベルリン展打合せ／②－11

9／26（月）夜、8時半過ぎ。リヒター氏よりTELあり。／◎展覧会は、ベルリン東洋美術館がやることになって、目下、細部について交渉中の由。運送保険の関係で、作品を平均30万円とするとか。つまり30万×10点＝300万円。／◎カタログは厚いものを作りたい由。／古典類も入れる。／◎リヒター夫妻、今年の九（ママ）月23日の結婚記念日で、30年の由。／旦那、1925年生。リヒター、1927生／八月に来ていたとか。10月下旬に、関西に来るとか。

【解】昭和五十六年（一九八一）十月二十三日の記述に続く連絡。

日付不明（十一月―翌年三月の間）／貞心尼『蓮の露』／③－1

「蓮の露」で貞心が書かなかったところのものは何か。貞心にとって一番大事なところ、核心、を見ぬけ。当事者が自分を語るとき、核心は決して浮上させない。押し込み、後ろに隠しておく。つまり、本音は陰して、立前だけを前に出す。

【解】昭和五十八年（一九八三）十一月二十二日夜行寝台で発、翌朝柏崎着、和島、与板、燕、長岡、糸魚川を巡って、二十七日帰宅の旅程で、良寛、貞心尼調査の記述、手帳②－11に有り。また、翌年（一九八四）三月二十八日発、東三条、弥彦、吉田、和島、与板を巡って良寛、貞心尼調査し、三十日東京経由で、三十一日帰宅の記述も手帳②－12に有り。本記述は、そのいずれかあたりの記述と思われる。

十二月十七日／「有願の里、新飯田」印刷／②－11

「有願の里、新飯田」のガリ版印刷。

昭和五十九年（一九八四）

一月十四日／「有願の里、新飯田」寄稿／②－12

「良寛」誌へ、「有願の里、新飯田」寄稿。

日付不明（一月頃）／『山階通信』二月発行号草稿／③－2挿み込み

「火を焚つけ火を焚け」と叫んで息をひきとる。人の生と死を象徴しているではないか、この方が、私には好きである。人間近い。

【解】『山階通信』昭和五十九年（一九八四）二月発行号に、「「病、日にそひおもりて、たへがたく覚ひければ」として辞世を書き残してまもなく、まったく一変、「さむい、さむい、火を焚け、火を焚け」、弟子の孝順、智譲に叫びつづけて、息をひきとる。人の生と死を象徴するかのうように貞心尼は、明治五年（一八七二）二月二十一日、示寂する。」と、記述が有り、この草稿と考えられる。

日付不明（一月頃）／良寛と一休、大灯国師の書の比較／③－2挿み込み

重苦しい。どことなく重い。一休のようにセイゼツで、切るものがなく、大灯のように、ねばり奥の広さと深さが見えない、良寛の、空間の世間の限りない、自由がない。

日付不明（一月頃）／良寛と貞心尼／③－2

良寛に人の艶をかいま見せて、良寛に貞心尼があったことは、やはり、よかったことであった。

【解】『山階通信』昭和五十九年（一九八四）二月発行号に、「貞心は晩年の良寛に、男と女の出会いによって醸し出される潤いとぬくもりの〝艶〟を呼びさませた。」と記述が有り、前掲の「火を焚つけ火を焚け」の記述同様の草稿と考えられる。

日付不明（一月頃）／「捨てた」ということ／③－2

（良寛のことか）「捨てた」ということは、捨てたそのことにこだわりが残ってい

ることを、また意識している。

二月二十日／『山階通信』二月発行号ガリ切り／②－12

貞心尼のガリ版切り。

【解】『山階雑記』二月発行号「孝室貞心比丘尼」の原稿。同年十一月に『柏崎春秋』紙に若干の修正を加えて、四回に亘って掲載有り。

二月二十五日／県展審査員応諾／②－12

新潟日報社、東京支社、甲田氏来り、県展の件。承諾の返事をする。

【解】第三十九回新潟県展の書道部門の審査員に平田華邑と担当している。同年五月二十五日および、二十八日の記述参照。

三月四日／『神々の誕生』題字書き／②－12

諸橋氏依頼の「神々の誕生」の題字書き。

【解】翌五日「終日、「神々の誕生」タイトル文字書き」の記述、同手帳②－12に有り。また、同月十二日「名著刊行会諸橋氏宛「神々の誕生」のタイトル文字発送。」の記述も同手帳②－12に有り。

三月十九日／「沢庵」原稿執筆／②－12

「沢庵」原稿、大方のメドつく。

【解】同月二十四日「墨」、金成氏宛に沢庵の原稿送る。」の記述、同手帳②－12に有り。

三月二十九日／テレビを見て／③－1

29日、夜「この人」NHK、はっぱむとし「訳者の涙は血の色」／俺は血の色か。こうでなくた、いかんな。

【解】三月二十八日発、東三条、弥彦、吉田、和島、与板を巡って良寛、貞心尼調査し、三十日東京経由で、三十一日帰宅の記述も手帳②－12に有り。二十九日「弥彦、吉田の願成寺、島崎の隆泉寺行後、与板八幡荘泊り。」の記述、手帳②－12に有り、与板での記述と考えられる。

日付不明（三月二十九日）／**良寛と隆泉寺／③－1**

◇隆泉寺は能登の出という。木村家は屋号を能登屋といい、隆泉寺を菩提寺とする。しかし、隆泉寺は能登屋との間に何かの確執があった感じ。もう一度その辺のこと、隆泉寺に聞く事。／◇隆泉寺の一切経の虫ぼしは何時か。良寛の書き込み（註記）がある由。黄バク本という。／○与板資料館オバサンのコピー（中村浩章発の）／○八幡神社の供香額写真→資料館で聞く。その後も行われたのか。

【解】前掲の同日記述の後に書かれているので、夜、翌三十日の行程の検討記述と思われる。

日付不明（三月三十日）／**良寛と徳昌寺過去帖／③－1**

徳昌寺の過去帖に「大愚良寛首座」／禅宗の位／とある。これは弟子の中の位。にもかかわらず今の大和尚、首座、上座／「「石に聞く」」、墓の不ツリ合い。周囲の誰れかが演出して勢大にしたのか。（香料も）それ、／年令はいれないでおいたのは、若い方が良寛とのかかわりあいで、よいと思ったから、という。

【解】与板、徳昌寺は、同月三十日に訪ねている。

日付不明（三月三十日）／**大蔵経入手での良寛の影響力／③－1挿み込み**

一人の人間が、しかも、その一人の人間が、僧でも尼でもない、庄屋や豪商でもない、百姓鍛冶職人だったら、自分が生きるということ自体たいへん難儀な時代だったということの、その前提に置いての虎斑の請蔵費用のネン出である。右から左へというわけにはいがなかったであろうことは理解できるし、だから、せっかくの大蔵経が入手困難になりかかる事情もよくわかる。その口ききに、それほど良寛は力があったのだろうか。なぜだ、それは。

【解】文政十一年（一八二八）四月、木村家十一代、元右衛門利蔵は、兄十代元右衛門の遺志を継ぎ、菩提寺隆泉寺へ一切経六千七百七十一巻と、収める経蔵を寄進する。その由来を良寛が木札に謹書している。

日付不明（三月三十日）／**良寛と維馨尼／③－1**

◎佐一を想う詩の中に、維馨尼を想う心あり。◎貞心の高まりが与板であるが、これは、この裏に維馨尼のことを見落してはならぬのではないか。佐一と良寛のことも。

【解】維馨尼（きし）は、三輪佐一の姪。佐一は良寛と深く交友し、良寛は、きしを可愛がった。

日付不明（三月三十日）／**良寛と維馨尼／③－1**

「尼さん」—座像／中村に一ヶ所／「山沢」（無住）／⑤／→「観音堂」／あったっあ／大阪屋の別荘の上—明治23年頃／由之の隠栖跡／松下庵→「善学推定」／

［中川清兵え］／跡／釈迦堂　弘安年間の地図にある。／龍タン寺／龍タン寺（石田三成、伊井氏菩提寺）は、彦根にあるので、そこで調べる。／山沢の無住庵／浄土真宗的らし／浄土宗の場合は／［与の字が必ず一字入る。］／［佐一］も同時に調べること。／維馨尼の子供の有無。／うれしいな、うれしいな。しかし、だん〳〵深入りする。やはり歩くものだな。／［〇「尼庵」とは宗旨の違いはあるのか、］

【解】三月二十八日―三十一日の越後行での調査や出来事は、『山階通信』翌六十年（一九八五）四月―六十一年（一九八六）三月発行号までの五回に亘って記述されている。

四月五日／《花眼》表具依頼／②-12

午前、龍門書関係、読み。午后、物部表具店行。「花眼」屏風、他、裏打依頼。

【解】この時、表具依頼した《花眼》（白寿p183、S56-F-16）と思われる。昭和五十五年（一九八〇）十一月二十三日の記述参照。

四月七日／「北魏龍門二十品の書」原稿執筆／②-12

終日、有田氏依頼の「北魏龍門二十品の書」草稿づくり。

【解】『季刊書の美』第三十号「竜門造像題記」。同月十日「有田氏へ、「龍門の造像題記」4枚、発送。」の記述、同手帳②-12に有り。

四月十三日／弦巻松蔭手紙執筆／②-12

午前、新潟日報社、池氏来り、県展の為の取材。弦巻松蔭氏宛、葉書かく。5月20日に訪問の件。

五月十二日／弦巻松蔭の電話／③-4

朝8時、弦巻松蔭氏よりTEL。皆が神経質になっているので、表立っては会えないが、隠密で会うことに、と言う。変な話。出品者は堂々と作品を見せようと、何故胸を張らぬのかと思う。↑5／20に弦巻氏宅訪問への返事也。

【解】弦巻松蔭は、草玄らが墨人会を結成した昭和二十七年（一九五二）の前年、上田桑鳩の奎星会に同人として参画しており、また、地元の書道研究会「手毬会」も同二十七年に結成している。その上、この年の県展前年、五十八年（一九八三）には新潟県美術館連盟理事長に就任しているため、今年度の新潟県展審査員となっている草玄と合うことを他会派の目もあり、面会をためらったものと考えられる。

五月二十五日／第三十九回新潟県展審査の反省／③-4

弦巻松蔭展会場で白倉氏と会う。あとで、二人で一杯。その前に、弦巻氏と別れる時、弦巻氏、一寸、いや味（県展審査に関する）ととれる言い方をしていた。若い者の無鉄砲さを賞めなければと。／然し、実際の作品の中で、それは無かった。平板、扁平、がさつのものでしかなかったので身びいきの反対の、きびしさの目になっていたのであった。それに反して平田華邑の目は、すべてAにしていた。途中おかしい（彼、平田の評価が）ときづいた時には手おくれ。そして、白倉氏との話で、県展賞を取った人は、平田のところに送っていた、という。仮名作品三点が受賞対象になって、他の二点の方を自分は買って、受賞作品は、相当落ちると思って、その意思表示を何回もしたのだが、彼、平田は強くそれを押していた。／白倉氏の言から押すと、裏取引を考えないわけにはいかぬようだ。／世間しらずの対し方であったと、反省と、ザンキである。／評価は必ずしも彼と我とは同一でないということを始めから心してかからねばならなかったのだ。／5／25東京行の新幹線車中で／自分の目に見識をもたせてやる、だけではだめであった。悪ヘイ書壇の原型がそこにあったといわねばならない。

五月二十八日／十万円の返却／②-12

十万円を送ってきた村松の何とか玉翠へ返却する。

【解】59.5.28付、草玄差出人の田辺玉翠宛書留郵便物受領書貼付有り。「¥100,000」及、作品、手紙類、全部返却」と草玄記入有り。草玄の、新潟県展審査の前、同月十八日出発、柏崎、新潟を巡って、二十二日審査、その後、長岡、与板、三島、燕、新潟の後、二十五日上京し、二十七日帰宅している記述が手帳②-12に有り、不在中の送金だったため、帰宅しての返金となったと思われる。

六月十三日／六月の会展搬入／②-12

〇搬入

【解】翌十四日「〇初日」、十九日「搬出」の記述、同手帳②-12に有り。

六月二十三日／『山階通信』七月発行号ガリ版切り／②-12

「天華上人」ガリ版切り

【解】『山階通信』同年七月発行号に掲載あり。翌二十四日「「天華上人」ガリ印刷」、二十五日「ガリ印刷発送。」の同手帳②-12に有り。

七月十四日／『墨』「米山」原稿依頼／②－12

墨、金成氏から、米山特集（11月号）の為の原稿依頼。

【解】 八月二十七日「米山―その熾烈なる生命の書―」完。清書。」および、「九月三日「〝墨〟への米山の原稿発送。11枚。」の記述、同手帳②－12に有り。また、同手帳②－12の裏表紙見返しに「米山の書に一言語らせたい。」の記述有り。『墨』五十一号・十一月号「三輪田米山」に「評論2米山と現代　その熾烈なる生命の書」として掲載有り。

七月二十日／二曲の《忘筌》か表具出来／②－12

物部表具店、二曲及裏打出来、持参。

【解】 同年八月十三日からの「草玄の書・南海雄の書」に《忘筌》（白寿p181、S55-F-2）と《花眼》（同p183、S56-F-16）が出品されていることから、二曲屏風の《忘筌》と思われる。同年四月五日に《花眼》の表具依頼をしていることから、同時点に両者ともに依頼したかと思われる。

日付不明（七月頃か）／**米山の書／③－3**

米山はデイ酔の下で書を揮毫した。泥酔は神官としての聖職から逃げ出すことであったのか。だとしたら米山が書を書くという行為は、人間のなかにひそむ、悪そのものへの畏敬であったと言う方が正しくはないか。エタイの知れない動揺からの脱出、それが彼を泥酔せしめ、書揮毫へかりたてしめていたと言ってよいのではないか。妙にうつろな、翳りがその書の中に見えるのは、そのせいだと思われてくる。／［土地カン］／［暗さ］

日付不明（七月頃か）／**米山の臨十七帖の衝撃／③－3**

米山、というとき、何といったってまずすぐ浮び出てくるのは、十七帖の臨書である。墨美ではじめ見たときの、これはショウゲキ的であった。

日付不明（七月頃か）／**米山の書／③－3**

あのくらい正直に米山ではあったが、それが自分の個性を徹性（ママ）して生かしきった事は不思議。それは［彼にはどこにも、自分以外のところに範を求めても規とするものがなかったからである。］／夢中になって書にボツ入している彼がうらや（ま）（欠）しい。自分が満足すればそれでよかった。気がねも見えもまるで無かった。私も、どちらかというと酒が嫌いでない（を好むので）、あまり大きなことは言えないのだが。米山書き

【解】 手帳②－12昭和五十九年（一九八四）七月二十三日「午后、桜塚高校行。集まる者原田、奥野、池田。米山のことについて聞く。」および、同月三十日「終日、米山のための読書。」と記述有ることから、同月七月十四日に『墨』編集部から、米山の原稿依頼をされ、八月の「草玄の書・南海雄の書」の開催後にまとめていく中での記述と考えられる。

八月四日／毎日展の感想／②－12

美術館での毎日展見る。如流、甘く、右卿、世界を持たず、その他、全くどうにもならず。

【解】 第三十六回毎日書道展、八月一日―五日、京都市美術館。右卿《忱》出品。

八月六日／読売新聞から「草玄の書・南海雄の書」の問い合わせ／③－5

八月六日　十二時二十分、読売新聞、中島という女性の人から電話有。出品点数、及、前衛書道の区分のこと、及、「富士山」の制作法について尋ねらる。

【解】 八月十二日―十七日開催の「草玄の書・南海雄の書」（銀座・洋協ホール）の問い合わせと考えられる。この二人展では、図録類が制作されなかったが、この時の出品作に文章を加えて同六十二年（一九八七）、『一九八四年　草玄かな書きの書』にまとめられた。《富士山》は磯部南海雄の作品。

日付不明（八月八日―十一日の間）／**書とは／③－5**

［書とは、文をしるす、事也。］

八月十一日／「草玄の書・南海雄の書」搬出／③－5

八月十一日／運搬自動車が予定より遅れること約一時間。午后六時半積込み。／七時五分発で上京。／日傷会館に久幸と泊り。

八月十二日／「草玄の書・南海雄の書」展示／③－5

八月十二日、午前七時出発、画廊前、七時四十分着。／大勢、来てくれる。新井狼子、田村みや子、大沢力、日置路花、さが恵、板垣、久嘉、ムコ殿、石川ウルフ、石原則子等々。／予定通り十二時迫、大体完了。安堵。／オープニングパーテー、宮川寅雄氏から挨拶してもらい、乾杯も。／狼子、司会役に。

八月十三日／「草玄の書・南海雄の書」取材①／③－5

○〝墨〟の部長篠崎竹雄来り、「花眼」の写真を持ち帰り、南海雄の「原野」の写真

をあとで送ること。／午后二時半、新潟日報記者纐纈（コウケツ）氏来り、取材。

【解】《花眼》（白寿p183、S56-F-16）の写真。

八月十六日／「草玄の書・南海雄の書」取材②／③－5

○〝墨〟の金成、井口両氏来、十一月号に出す為の写真持ち帰る。（顔写真を送ること。九月初旬迄）／○朝日夕刊に記事出る。

八月十七日／「草玄の書・南海雄の書」取材③／③－5

八月十七日／〝墨〟の与那覇氏来。〝年鑑〟に出したいとかで、作品のネガ（カラー）必要と。「たぶれたる…」「原野」。

【解】「たぶれたる…」は、《たぶれたたる狐たたずみ》（白寿p182、S55-F-4）。前掲八月十三日の記述中に「南海雄の「原野」の写真をあとで送ること。」とあることから、《原野》は、磯部南海雄作品。

八月十八日／宮川寅雄訪問／③－5

八月十八日　八時半出発。東京駅コインロッカーに荷物を入れて、十時、白鷺の宮川寅雄氏宅行。作品と交換に本、『歳月の碑』、八一の「和敬静寂」、「学規」／［世の人、書くことー／酒にさいなまれ／ひきまわされ／その書にその己れの／無惨さの投影が／なされないではおれなかった。］の複製を貰う。十一時半ジ去。

九月十九日／須田剋太への不信／②－12

須田剋太氏から「私の曼荼羅」の案内来る。手紙入っていない。東京展に来なかった詫びと、出版見本を配布依頼の手紙一枚入っていない。序文に偉い方の名前をズラリと並べているやり方に不快感あり。

十月十五日／リヒター夫妻来訪／②－12

◇リヒター夫妻来訪予定（后4時頃）4時頃、リヒター夫妻来。ドイツ展の件。

【解】本稿で対象にしている①～③の手帳、雑記帳類以外の草玄の手紙やメモ類に、前月九月二十二日および二十九日付のこのドイツ展の経過メモあり。以下に記す。

59．9．22　夜六時過ぎ、今岡徳夫から電話あり。リヒター氏の伝言を聞く。十月中頃にもう一度上洛するから、そのときに作品写真五～七点好きな古典名を一つ、あとでもよいが、小品（色紙大以下）を十点。これはカタログの中に入れる由。

九月二十九日　夜八時三十分、リヒター氏から電話あり。／小品の寸法訂正の件（二三×三〇㎝）／松井如流、西川寧、日比野五鳳の三人出品辞退。代りに日比野光鳳、堀桂琴参加とか。／十月十五日夕方、リヒター夫妻来訪時に聞くことの件／作品の集荷日――二月頃／・〝費用の負担は、無／・ガラス入りの額装でもよいのか、×、軸に／・小品十点は、何時、どこ迄、届けるのか。――巾23、タテ30／60．1月／・その代金は、無償か、有償か／・最終決定の顔ぶれは／・カタログに文を書く人は、森田、リヒター、小松茂美氏は駄目であったとか／屏85　100＋10％／作20　30＋10％／写真は何時迄、11／15　十二月下旬迄、ドイツ／↑書歴／リヒター10／28朝ＴＥＬ／○ガラスでなく、アクリル製でも額は駄目か（ＯＫ）／○カタログに入れる小品点数は、一点か十点か（十点）

十月十九日／ドイツ展作品写真撮影／②－12

小山行。ドイツ行の作品写真撮り。

十一月二十四日／相沢直人と「すてられぬこころすててこそ」の納入相談／②－12

（欄外に）11／24、相沢氏との取り決め／○天理、北洋大教会応接間用「すてられぬこころすててこそ」43×70㎝

【解】《すてられぬこころ すててこそ》（白寿p181、S55-4-1）。

十二月七日／ドイツ展作品写真撮影／②－12

小山行。ドイツ行の額のガラスをアクリルに変（ママ）える。

十二月二十二日／北洋大教会納入作の額完成／②－12

物部表具店行。天理行の額が完成。作品は「すてられぬこころすててこそ」の文。

日付不明（十二月―一月二十七日の間）／制作と集り／③－5

制作とは、いかにして自分だけしかない世界を持ち出すかという、孤独に徹底しなければならない場所。／集りとは、そのように個にとじこもって制作している人間の一人一人が、或る場面では激突し合う場所。協調と激突の場。

昭和六十年（一九八五）

一月二十一日／須田剋太への不信／②－13

大阪ギャラリー白での例年の第三回4人の画家による書展行。須田剋太氏の作品、年々悪くなる。ただ形骸の線を腕力で引いているだけ。余技だとはいっても書を甘く見るな。

一月二十五日／ドイツ展作品表具出き／②－13

物部表具店、ドイツ行の三点、一山一寧の圓字一点持参。

【解】この時点で、草玄はまだ、ドイツ展が中止になっていることを知らないため、表具の準備を進めているが、同年一月二十二日付でベルリン東洋美術館長ラグー(Beatrix von Ragué)からの「近代日本の書道芸術展『書』」開催断念のサイン入り詫び状が発信されている。以下和訳文。

謹啓／ベルリンの東洋美術館とシュトゥッツゥガルトのリンデン博物館が本年五月末当ベルリンに於て「近代日本の書道芸術展『書』」の開催を計画しておりました事は先生も御承知の事と存じ上げます／シャールシュミット・リヒター氏が両博物館の委任を受けて　昨年　先生並びに他の九人の書道家の方々とその件に付き詳細な打ち合はせを行っておりました／ところが本日は誠に遺憾乍らこの展覧会が開催不可能に落ち入ってしまいました事をお知らせしなければならないはめになってしまいました　先生が既に展覧作品の準備の為になさった御作業と御尽力に対して深くお詫申し上げる次第で御座居ます／展覧会取消しに至りました理由は　一九八四年十二月初旬政府がシュトゥッツゥガルトのリンデン博物館に対して展覧会用予算を急に大幅削減した為　リンデン博物館が「書」の展覧会に参加出来無くなった事で御座居ます　このリンデン博物館が当展覧会必要経費の半分を受け持つ事になっておりましたので　この政府決定は当ベルリン東洋美術館では当展覧会開催費の半分だけしか計上出来ませんので(日本・西独間の往復輸送費だけで四百八十八万円必要とする次第です)すぐさま他の資金提供者を見つける事に努めました　リンデン博物館の参加無しにこの展覧会を開くには　個人或いは公共の資金提供機関が展覧会開催の全経費を当館と折半しなくてはなりません　再に全経費支払い可能の旨を一九八五年一月九日迄に証明しなければなりませんので経済的援助者を探す時間はあまり残っておりませんでした　この短い期間に　シュトゥッツゥガルトの代りを見つける事は残念乍ら出来ませんでした／　他の博物館・美術館は既に一九八五会計年度の展覧会計画を建て終ってしまっており他の展覧会に参加する余裕は残こされておりませんでした　また他の資金提供者・機関からは開催に必要な援助額の承諾を得る事が出来ませんでした／斯様な訳で一月九日博物館行政局の会議で「書の展覧会」開催中止決定のやむなきに至った次第で御座居ます／リンデン博物館並びに当館員一同又シャールシュミット氏もこの成り行きを深く遺憾に思っておりますす事何卒お信じ願わしゅう存じます　同氏がベルリンとシュトゥッツゥガルトの展覧会の為に日本に於て如何に一所懸命に活動したかは先生御自身もよく御存知の事と存じます／私共一同先生の御作品を拝見し　当地に於ても展示する事を楽しみしておりましたので此の度の仕儀には非常に落胆しております／しかし私共皆この様な作品の展示の意義を確信しておりますので　当東洋美術館はこの様な「書」の展覧会を将来ドイツに於て開催する存念でおります事をここに明言させて戴きます／私には先生にお詫びを申し上げる為の適当な言葉を見つける事が出来ません　シュトゥッツゥガルトの展覧会予算が一九八四年十二月になって突然削除された事が当館をこの様な苦しく悲しい立場に落し入れたと云う事を先生にお分り戴き度御願いするばかりで御座居ます／誠にお詫びの仕様も御座居ませんが　何卒御寛容を持ちまして　私共の苦衷をお察っし願わしく　御容赦の程御願致すのみで御座居ます／末筆乍ら先生の御健康並びに今後一層の御盛栄をお祈りしております／　敬白

また、その後、リヒターからも二月二日付で詫び状が送られている。しかし、返送されてしまい、三月十七日付で再送している。以下本文。

謹啓／昨日はベルリンの東洋美術館館長の手紙が御手に入たと思います　展覧会の準備中でそんなたいへん不慮な出来事あったのはまことに信じられない。本当にこんな事をして申訳が立たないです　この立派展覧会が今はベルリンで出きないのは非しみのために胸も張り裂ける思います／先生がこの展覧会の準備のためにいろ〳〵御骨折りで御座居またと御信用をいただきました。　私も一生懸命に世話やりましたけれども私の力が弱いですのにお詫申し上げます。／ドイツ国で経済的な問題おいので文化とか美術とか今はあまり必要ない物と思われるそうですから政府は文化部の予算案を早く削減します。このことに嘆かわしい事である。／しかし実はまた棄権したくりません。立派なカタログを作るための費用はドイツにある日独基金が負担することを約束してましたのでこの日独基金にこの書展覧会の費用を部分的に負担することの積りですから既にBONN(西ドイツの首都)の美術館(Art Hnu)との交渉にはいいりましたが期日またきめてないですが分かりましたらすぐに連絡します。／もう一度の御信用いただきたいように御願いいたします／御自愛専一に祈り上げます／敬白／江口先生／　二月二日／イルムトラドシャールシュミットリヒタ

(再送手紙)／アパートの番号を忘れました　忙しすぎるですから本当に申し訳けがありません／今日はこれだけ早く送ります／奥様によろしくお伝えて下さい／イルムトラウトシャールシュミットリヒタ／三月十七日

一月二十六日／一山一寧《圓》の感想／②－13

一山一寧の圓字、なかなかよし。一人、悦に入る。

二月一日／『良寛』誌原稿送付／②－13

「備中玉島円通寺」を清書して、夕方、「良寛」誌宛速達で送る。

日付不明（一月二十七日―二月二十二日の間）／**墨の色／③－5**

色は生きものであって、微妙に敏感なものであって、その微妙敏感な色に敏感微妙に感応しているさまが読めて、その細やかな感情と色への愛しさに、己れの墨への愚鈍を恥ぢしてしまった。／墨も五彩があること、昔から言われ、自分でも思ってきたが、体でそれをつかんていたかということになるとそれは甚だ心もとなくなってしまう。

日付不明（一月二十七日―二月二十二日の間）／**須田剋太の書／③－5**

奇をてらうのではない、狂になれと言いたいのだ。新しやがりをすすめるのではない。心に火を燃せと言いたいのだ。火中にこそ栗を拾えと言いたいのである。／剋太の書における剋太における芸術精神の曖昧さが現われていると言ってないか。彼は口に狸をえて絶対矛盾の自己同一を言いながら、その書の作に真実に触れないところが出ている。／書という形において人生如何に生きるべきかというそこのところが語られていなくて、ただ、形骸の積□（不明）、様式の横写しがあるだけである。

三月十五日／『墨』誌への葉書書き／②－13

〝墨〟別冊の為の葉書、かき。

【解】 三月十七日「終日〝墨〟の為の〝手紙〟書き。」、十八日「午后は〝墨〟の為の〝手紙〟コメント400字清書。」の記述、同手帳②－13に有り。

三月二十四日／松山、米山採拓行／②－13

朝7時40分松山港着。駅前で朝食後、道後温泉入湯。長善寺の乃万家墓、採拓。宿は、日尾八幡隣りの「ファミリー温泉」。

【解】 前日二十三日出発、二十七日帰着で、仲間数名と米山碑の採拓旅行の記述が同手帳②－13に確認できる。

三月二十五日／松山、米山採拓行／②－13

阪田班となって、／（中略）／日吉神社の「氏子中」中「中」字と、総河内神社の「長明灯」中、「灯」採拓。

三月二十六日／松山、米山採拓行／②－13

雨が少し降っているので、午前中、砥部焼行。／（中略）／客王神社の「天地」と「當」採拓。

四月一日／良寛への否定と肯定／③－6

良寛への否定と肯定。／まる〳〵のすべてを呑んでしまうのでなく、良寛への反発、否定が全く無しとしない。しかし思うに、いったんは、そういう否定的に視、或は良寛への反発を考えることでしか本当の意味での良寛への肯定的発見が可能というものではなかろうか。良寛の絶望的暗さは風土の暗さにもむすびついているのだが、しかしまたそれによって、いっそう希望と期待を夢みることができるというものでもある。とにかく良寛を否定的にとらえようとすることで、こんどは逆に私自身がゆすぶられていることの、いわば或る種の心地よさが残るという実感は肯定せざるを得ない。

四月十二日／『山階通信』四月発行号印刷／②－13

ガリ切、及、印刷。「越後の女性」稿。

五月十六日／貞心尼の良寛への手紙／③－7

記念館（註三十一）に貞心の良寛宛の手紙有。それに、「貴方様おとに」とある。よほど親しそう。馬之助（註三十二）でさえ「良寛様」と記しているのに。

（註三十一） 出雲崎、良寛記念館。この後、和島、木村家を訪ねていることが手帳②－13に確認できる。

（註三十二） 良寛の甥。弟由之の長男。

【解】 手帳②－13に五月十五日から十九日まで、柏崎、出雲崎、和島、巻、吉田、出雲崎、岩室、新潟の順での良寛調査の旅程が確認できる。また、雑記帳③－7にも調査内容等確認できる。

六月十日／有一入院の電話／②－13

朝、9時10分有田氏から有一が入院した由TEL有。（海上が、森田の電話番号問合せと）／有一自宅に10時半、TEL入れる。4日入院。元気だったのが、7日昼、おかしくなる。／激性（ママ）肝炎と。907。再起不能と。声かけても無反応と。／夜、（9:30）花子さんからTEL。血圧下がると。

六月十五日／有一逝去／②－13

有一死す。

六月十七日／有一葬儀／②－13

○有一通夜。藤沢、本町、妙善寺、午后7時から8時迄。「お供」として、五色豆¥500持参。雨、寒し。

【解】（同手帳②－13欄外に）「井上有一死亡6／15／午前9時50分」の記載と有一の死亡記事貼付（新聞名不明）。また、以降、六月十五日に合わせて菓子と灯明料を毎年井上家に送っていることが②各手帳から確認できる。

六月十七日／有一葬儀行／③－3

60．6．17／京都13時9分発こだまで上京、十六時十分小田原着。小田原十六時四十分発、藤沢十七時二十一分着。途中、チガ崎（ママ）通過。往年を想って、なつかしさ有。有一、木子の三人で墨人発足前のこと有（註三十三）。宿をさがすも、法華クラブも無し、松濤園も無し。しかし、井上家で法華クラブで用意してくれていた。泊る人、有田氏と二人。それと、森田、辻、馬場の、計五人也。

（註三十三）昭和二十七年（一九五二）十一月十九日、前日までの長谷川三郎「現代芸術について」講習会に参加の帰途、木子と有一宅を初めて訪れていることが、同年十一月二十一日付手紙（『墨人』第二号「往復文書公開」掲載）から確認できる。その際、草玄は、「井上氏と話し合いましたところ、三人の意志及行動が偶然に一致しました。／○書の道のためにも、また、この社会の為にも、純粋さを我々は求めよう。腹がまえをしっかり持ち合おう。その為にはいろいろな面で非常に苦しいことをも覚悟しなければならない。が何時か、誰れかがこのことはやらねばならないのだから、我々がそれをやると言うことは、実に名誉であり、うれしいことなんだから、ということになり、純粋在野の決意をしあいました。」と記述している。また、同日付の木子の三人で話し合った結果の一報も同誌に掲載有り。

六月十八日／有一葬儀／③－3

6．18（火）／朝から何時とはなしに雨。小雨。十二時から葬儀。十三時過、火葬場へ。十三時四十分頃、一国（註三十四）を雨中、マイクロバスは走る。黄色の実をつけた枇杷の木一本。アジサイが道の端に何本か、ぬれていた。十五時、骨上げ。十七時三十分、御徒町県人会館入り。／南浦和集合、狼子、路花、恵の四人で酔う。／有一茶毘、酔いくれあるくつゆのあめ。／井上有一［成就院愚徹日有居士］

（註三十四）国道一号のことか。

六月二十日／有一死亡コメント／②－13

夜、東京、美術新聞、大谷氏（中略）から有一死へのコメント希望のＴＥＬ有。コメントす。（森田に頼んだが、断られた由）（文字でないから）

六月二十六日／有一追悼文依頼／②－13

〝墨〟金成氏から、有一追悼文依頼される。7／20迄、3枚。

【解】七月六日「〝墨〟の為の井上有一追悼文三枚、完。」の記述、同手帳②－13に有り。また、「井上有一のこと」、『墨』五十六号（一九八五年九月一日発行）に掲載有り。

七月四日／墨人会から有一追悼号の依頼／②－13

辻から速達有。墨人誌で有一追悼号を出すので、文を書けと。勝手なこと言う。取材に来いと、返事を出す。

七月五日／墨人会から有一追悼号の依頼／②－13

今岡から夜ＴＥＬ。上記の件也。忘れていたと。

【解】「上記の件」とは、七月四日の記述のこと。

七月十九日／『山階通信』七月発行号発送／②－13

ガリ版、七月号発送。（「馬之助改悛の話」）

【解】『山階通信』には「馬之助改悛の話」の前に有一死去の記述があり、昭和二十七年（一九五二）十一月十九日に木子と有一宅を訪ねたことが記されている。同年六月十七日の【解】参照。

七月二十三日／原稿修正と臨書／②－13

午前「良寛」投稿の為の「貞心」の稿、手入れ。午后、小山行。「墨美」の遺偈の臨書。

【解】同月二十七日「「貞心」の稿、清書。小山行。」「二十九日「「良寛」誌第八号（60．11月刊）用として「貞心尼」の稿を送る。」の記述、同手帳②－13に有り。

日付不明（七月二十六日―八月二十七日の間）／**自称書道評論家の浅薄**／③―3

○本論に入る前の、雑談の類い。○そういう意味でなしにこれが顔を揃えた書道評論家と自称（あえて）する四人の人の本値（ママ）だとすると大問題。ものを真検（ママ）に考えようとしないで、浅薄、無知でしかない。

【解】四人が誰を指すのか不明。

八月三日／**『書の美』用、有一原稿完**／②―13

終日、有田さんの「書の美」の有一特集号の為の原稿作り。２枚、完。

八月九日／**中林梧竹の臨書**／②―13

午后、小山行、中林梧竹の臨。

八月十九日／**黒田千里への返信下書き**／②―13

黒田千里氏（註三十五）から久しぶりの暑中見舞来。それへの返事に「戦後四十年とい時間は戦前（戦中）のこわさが忘れられて、そのこわさになるこわさです。こわいことです。」と書いて出す。

（註三十五）陶芸家の黒田千里と思われる。

八月二十四日／**『北海道女流書作家集団会報』原稿清書**／②―13

午前中、北海道女流書作家集団の会報用原稿清書。

【解】北海道女流書作家集団の会報『紫陽花』に掲載の文は、昭和六十二年（一九八七）草玄が発行した『一九八四年　草玄仮名がきの書』に、「『書譚抄』は、北海道の女流書作家集団会報「紫陽花」に乞われて、一九八五年に作文したものです。」と記述が有り、再掲されている。

八月二十七日／**研究会**／③―3

60．8．27．朝、石川九楊へＴＥＬ。九月も十月も日曜日の空き時間なしと。石川九楊不参加のまま集まりを実施するしかない。／或る時書家の云うこと□（不明）貧乏した分、とりかえすのさ。／（日展審査のそのときこそ）／酔って、うと〳〵していると、カラオケの音に目がさめた。

九月十日／**有一のことで**／②―13

井上未亡人から「図書新聞」送られてくる。海上の宣伝大なり。

九月十六日／**九月の会**／②―13

九月の会集まり。岡崎、京都伝統産業会館。司会役。テーマは昨年九月号墨の「現代の書の批評は可能か。」／石川九楊欠。有田光甫来。

九月二十三日／**ＮＨＫ水上勉「良寛を歩く」を見る①**／②―13

夜10時15分から（教育テレビ）水上勉の「良寛を歩く」有。群馬県の新田町から入る。新しい視点。興味。さすが。

九月二十四日／**ＮＨＫ水上勉「良寛を歩く」を見る②**／②―13

夜、水上の第二回の「良寛を歩く」を視る。面白し。

九月二十五日／**ＮＨＫ水上勉「良寛を歩く」を見る③**／②―13

今夜のは平凡。「一本の杖」。円通寺。「家を捨てた良寛云々の発言は、俺の「良寛」誌に発表した玉島を歩く文を見てのことばかもしれない。

九月二十六日／**ＮＨＫ水上勉「良寛を歩く」を見る④**／②―13

今夜もまた平凡。「乞食と文芸」／五合庵生活。

九月二十七日／**「貞心尼」原稿返却要請**／②―13

良寛会から、先般の「貞心尼」の稿は11月発行の第８号に出せなくて、来年５月の第９号にということの由。返却するよう葉書出す。

【解】なかなか返却されなかったようで、同年十月十七日「良寛」編集室事務局宛に「貞心尼」の稿返却の件、再度、催促状出す。」の記述、同手帳②―13に有り。

十月十八日／**『山階通信』十一月発行号原稿執筆**／②―13

「維馨尼の与板」草稿づくり

【解】同年十一月九日「「維馨尼の与板」のガリ版切り開始。」の記述、同手帳②―13に有り。

十月三十日／西行の歌と地蔵堂／③－8

○大島花束「良寛全集」を見る。岩波文庫と全く、「雲華の件同じ。大島花束はどこでその資料を見たのか。／分水町歴史民俗資料館○大島花束「良寛全集」P.728［地蔵堂町（越後西蒲原郡）、今分水町となる。昔狭（セバ）村と言った。側を流れる信濃川の分流が西川で昔の狭川である。良寛の師の大森子陽の号、狭川もこれをとったものである。今の朝嵐橋の所が昔の狭の渡しで、西行法師がここを通った時の歌に、／越後なる狭の渡りの朝嵐きのふも吹くか今日も吹くらし／とある名所である。この歌はこれまでの西行の歌集には見えないが、しかし西行が鎌倉で源頼朝から貰った銀の猫は、そこで直ぐに子供に与えてしまったが、地蔵様丈は報じて越後まで来てこの狭村に安置した、地蔵堂の名はこれからおきた、と地蔵堂の縁起にも書いてあることから見てもこの歌は可なり味のあるものである。］

【解】十月二十七日から東京経由で、二十九日から新潟入り。三条、吉田、分水、与板、長岡、柏崎を良寛調査で巡って十一月二日帰宅の記述が雑記帳類③－8および、手帳②－13に確認できる。

十一月十七日／制作姿勢／③－3

60.11.17. 美術館行。／［書いている時、いち〳〵びく〳〵するな。小さなことなど、どうでもよい。］／撥雲

【解】同月十日の記述に、富岡鉄斎の記述があり、また、京都市美術館で「生誕150年記念 富岡鉄斎展」が開催されているので、「美術館行」は京都市美術館と思われる。

十一月十八日／『山階通信』十一月発行号発送／②－13

「維馨尼の与板」発送。

【解】「維馨尼の与板」の稿は十一月発行号を（一）として翌年三月発行号に（五）を掲載するまで、毎月連載発行する。

十二月十四日／『山階通信』十二月発行号ガリ切り／②－13

第二稿ガリ切り完。午后小山行。筆洗う水、冷たし。

【解】同月十五日「第二稿、印刷。」、十六日「第二稿分、発送。」の記述、同手帳②－13に有り。